清流の国ぎふ芸術祭　Art Award IN THE CUBE 2023

「リアル」のゆくえ

IN THE CUBE 2023

Where “REALITY” Goes

清流の国ぎふ芸術祭

Art Award IN THE CUBE 2023

清流の国ぎふ芸術祭

Art Award IN THE CUBE 2023

目次
Contents

004 ごあいさつ
Foreword

006 開催概要
General Information

審査員・講評
Judges・Comments

009 入江 経一
IRIE Keiichi

010 岩崎 秀雄
IWASAKI Hideo

011 北村 明子
KITAMURA Akiko

012 四方 幸子
SHIKATA Yukiko

013 寺内 曜子
TERAUCHI Yoko

014 森村 泰昌
MORIMURA Yasumasa

015 山極 壽一
YAMAGIWA Juichi

第1章　図版
Chapter1 - Catalogue

019 INAGAKI MOMO
イナガキ モモ

023 大西 康明
ONISHI Yasuaki

027 岡 ともみ
OKA Tomomi

031 奥中 章人
OKUNAKA Akihito

035 北川 純
KITAGAWA Jun

039 GengoRaw(石橋 友也+新倉 健人)
GengoRaw (ISHIBASHI Tomoya+NIIKURA Kento)

043 小孫 哲太郎
KOMAGO Tetsutaro

047 柴田 美智子
SHIBATA Michiko

051 身体企画ユニット ヨハク
YOHAKU

055 千田 泰広
CHIDA Yasuhiro

059 千葉 麻十佳
CHIBA Madoka

063 古屋 崇久
FURUYA Takahisa

067 florian gadenne + miki okubo
フロリアン・ガデン+ミキ・オオクボ

071 山本 雄教
YAMAMOTO Yukyo

第2章　記録
Chapter2 - Document

076 募集から審査までの記録

080 関連プログラム[プレイベント]

082 AAICの特徴

084 展覧会概要

085 表彰式／開場式(テープカット)

086 会場風景

087 学校団体鑑賞

088 関連プログラム[会期中イベント]

090 関連プログラム[会期中ワークショップ]

第3章　資料
Chapter3 - Data

094 スケジュール

095 広報

100 来場者アンケート

102 会場風景

104 運営体制

106 企画委員長 総評
Project supervisor's Comment

ごあいさつ

「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE」は、69回の歴史を刻んだ岐阜県美術展を刷新し、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的として創設した、3年に1度開催する全国規模の企画公募展です。

3回目となる今回は、海外31作品を含む574作品の応募をいただき、その中から14作品が展示され、4月22日から6月18日の50日間で61，763人もの方々にご鑑賞いただきました。会期中には、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが第5類に移行され、今回の公募テーマ“「リアル」のゆくえ”のとおり、日常の中に少しずつ「リアル」が戻ってくる、まさにその過渡期に展覧会を開催することとなりました。

また、新たな鑑賞スタイルとして、ウェブ上から展覧会場をリモートで体験できる「バーチャル鑑賞」を公開し、作品を前にして感じるリアルの良さ、時間や場所を選ばず誰もが気軽に芸術作品に親しめるデジタルの良さ、双方の良さに触れていただけたと思います。

本展覧会の開催にあたり、ご支援ご協力を賜りましたすべての皆様に、深く感謝申し上げます。

また、今回入選されました作家の皆様が、このAAICを契機として、全国そして世界へ羽ばたいていかれることを祈念するとともに、本展覧会が岐阜県の文化芸術のさらなる発展に寄与することを心から願っております。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会　名誉会長
岐阜県知事　古田　肇

「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE」は、3回目を迎える今回も様々な分野で活躍されている7人の審査員に選ばれた才能あふれるアーティストの多彩な作品が選ばれ、4月22日、大きく注目される中、幕を開けました。会期後半からは、来場者数が爆発的に伸び、開館前には入場待ちの列や各キューブ作品にも長蛇の列が発生するなど、非常に多くの方々にご来場いただきました。

特に、SNSによる「非常に面白いイベントである」との情報が広がり若い世代や子連れファミリーなど、あまり美術館に足を運ばないような層にも多数お越しいただいたほか、県内小・中・高・特別支援学校の児童・生徒を対象とした「学校団体鑑賞」を実施し、間近に作品に触れる鑑賞機会を提供することができました。また、関連プログラムの一環として、入選作家によるワークショップや、審査員によるクロストークを開催し、多くの方々に「現代アート」を身近に感じていただきましたことも大変嬉しく思います。

かくも、盛大に開催できましたこと、協賛・助成いただいた皆様、審査員、企画委員並びにボランティア、制作アドバイザーなど本展覧会の開催にあたりご協力いただいた関係各位に、心より感謝申し上げます。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
会長　土屋 明之

Foreword

Gifu Land of Clear Waters Art Festival - Art Award IN THE CUBE (AAIC) is a nationwide exhibition held every three years as an open art competition, with a view to discovering and fostering new creative talent while building on the tradition of its predecessor, the Gifu Prefecture Art Exhibition, which had been held 69 times in the past.

Held for the third time, AAIC 2023 received 574 entries including 31 from overseas. Of these, 14 entries were selected for the exhibition, which ran for 50 days from April 22 to June 18, 2023 and attracted 61,763 visitors. During the exhibition period, the status of Covid-19 was downgraded to Class 5 under Japan’s infectious disease control law. As a result, the exhibition coincided with a period when REALITY was slowly returning to everyday life, which increased the timeliness and relevance of the theme of AAIC 2023, “Where ‘REALITY’ Goes.”

The exhibition was also held in a virtual format, allowing people to enjoy art in a new style through a website. In doing so, we combined the advantage of actually experiencing and seeing works of art with one’s own eyes, with that of a digital setting that allowed anyone to enjoy art easily, at any time and anywhere.

I would like to express my heartfelt gratitude to all people who assisted the exhibition.

Lastly, I sincerely hope that AAIC will help the artists selected for the exhibition to achieve greater success both nationwide and internationally and that this exhibition will help enhance the presence of Gifu Prefecture as a cultural and artistic center.

Honorary Chairperson of the Executive Committee of Gifu Land of Clear Waters Art Festival
Art Award IN THE CUBE

Governor of Gifu Prefecture　Furuta Hajime

The exhibition of the third Gifu Land of Clear Waters Art Festival - Art Award IN THE CUBE (AAIC) opened on April 22, 2023, featuring a diverse range of works by talented artists, selected by a panel of seven distinguished judges from different fields. While the exhibition attracted intense public interest from the start, the number of visitors increased greatly during the latter half, with long queues forming even before the opening time of the exhibition and in front of the exhibits placed in cubes.

It is particularly noteworthy that comments spread quickly via social media that the exhibition was “very interesting,” which attracted many people, including those with few opportunities to visit art exhibitions such as young people and families with small children. We also ran a group visit program for students of elementary schools, junior high schools, high schools and special support schools in Gifu Prefecture to give them the chance to see the outstanding works of art firsthand, while organizing workshops inviting artists whose works were selected for the exhibition and a related talk session among the judges. We are thrilled that the exhibition brought many people closer to contemporary art.

I would like to offer my deep gratitude to all people who contributed to the success of the exhibition as sponsors, supporters, judges, planning committee members, volunteers, production advisors or in other roles.

Chairperson of the Executive Committee of Gifu Land of Clear Waters Art Festival
Art Award IN THE CUBE

Tsuchiya Akiyuki

開催概要

名称	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2023
目的	・新たな才能の発掘と育成 ・アートに関わる人材の育成とネットワークづくり ・新たな形のアートの鑑賞機会を提供
テーマ	「リアル」のゆくえ
作品条件	4.8m（幅）×4.8m（奥行）×3.6m（高さ）のキューブ空間で展示できること。
会期	2023年4月22日（土）から6月18日（日）まで（開館日：50日間）
会場	岐阜県美術館（岐阜県岐阜市宇佐4-1-22）
展示数	14作品
審査員	入江 経一　建築家／デザインディレクター 岩崎 秀雄　アーティスト・研究者／早稲田大学理工学術院教授、metaPhorest代表 北村 明子　ダンサー・振付家／信州大学人文学部教授 四方 幸子　キュレーター・批評家／美術評論家連盟会長 寺内 曜子　美術家 森村 泰昌　美術家 山極 壽一　総合地球環境学研究所所長
主催	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会 岐阜県

General Information

Name	Gifu Land of Clear Waters Art Festival - Art Award IN THE CUBE 2023
Purpose	- To discover and nurture new talent. - To train people related to art and to create a network. - To offer opportunities for appreciation of new forms of art.
Theme	Where “REALITY” Goes
Conditions	Submitted works must be displayable in a cuboid space measuring 4.8m (w) x 4.8m(d) x 3.6m (h).
Exhibition period	April 22 (Sat.) – June 18 (Sun.) 2023: Open for 50 days
Venue	The Museum of Fine Arts, Gifu (4-1-22 Usa, Gifu City Gifu Prefecture)
Number of exhibits	14 Works
Judges	IRIE Keiichi　Architect/Design Director IWASAKI Hideo　Artist and Researcher/Professor, Faculty of Science and Engineering, Waseda University, Director of metaPhorest KITAMURA Akiko　Dancer and Choreographer/ Professor, Faculty of Arts, Shinshu University SHIKATA Yukiko　Curator and Critic/ President, International Association of Art Critics, Japanese Section TERAUCHI Yoko　Artist MORIMURA Yasumasa　Artist YAMAGIWA Juichi　Director-General, Research Institute for Humanity and Nature
Hosts	Executive Committe of Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE Gifu Prefecture

審査員・講評
Judges・Comments

入江 経一
建築家／デザインディレクター

IRIE Keiichi
Architect/Design Director

一次審査講評

現在の世界に対して、「リアルのゆくえ」という問いかけに対する答えはあるのだろうか。

真実らしさを求めた遠近法から始まって、100年前には芸術という枠組みも壊され、今や情報は実体より大きい。そんな現在の世界に対して、「リアルのゆくえ」という問いかけに対する答えはあるのだろうか。その対象は身体でも環境でも情報でもいいが、燃えるような「リアル」と書き込まれた字があるのなら、答えなどいらないのかもしれない。私は次のような選考のガイドラインを決めた。

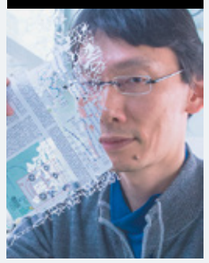
❶今の時代の状況を映し出すもの
❷新たな価値観を予見させるもの
❸社会や人々へのフィードバックがあるもの

いまだ語られていない言葉や言動を見せるような作品が見たいと、574点の作品に向かい合ったが、選ぶのはとても難しかった。アートの概念は強固なものだと実感する。逸脱や価値の定まらないものは審査で得票することも難しいが、ともかくも力作が選ばれた。実制作を通してさらに芳醇な作品となっていくのが楽しみである。

二次審査講評

一体自分はどこにいるのか。
今ここにいる自分を自分だと思っているのは幻想に過ぎないのか。

「触れるもの、絶対に触れないもの」
何組かの猿たちが梯子の上下で互いに見つめあっている。互いにそっくりだが片方の猿は片手がなかったり、のど首を欠いていたりして少しだけ完全とは言えない。猿の顔や胴体の一部は鉛のような表面で覆われていて、実は猿ではないことを暗示している。そう、一目見ればわかるように、このユーモラスな猿たちは今やたくさんの自己に分裂した「私」へのアイロニーなのだ。
一体自分はどこにいるのか。今ここにいる自分を自分だと思っているのは幻想に過ぎないのか。作者は分裂し複製された自己をアバターと呼んでいるが、いまやそれは一つどころか多くの自分となって現実空間にもネット空間にも拡散されてしまった。そんな私という存在に生じている事態を、この作品は諧謔をこめて突きつけているようだ。君が思っている自分（リアル）なんて不完全なものさ。猿は手ごわい。



岩崎 秀雄

アーティスト・研究者／早稲田大学理工学術院教授、metaPhorest代表

IWASAKI Hideo

Artist and Researcher/
Professor, Faculty of Science and Engineering, Waseda University,
Director of metaPhorest

一次審査講評

**キューブに実装される作品は、すべてリアルであり、
リアルではない両義性として私たちの前に立ちはだかる。**

様々なアイデアをキューブの形に実装する意欲的な企画が寄せられた。まずは応募してくださった作家の方々に心からお礼申し上げたい。私には様々な作品の可能性に出会える点で有難いことだったが、570あまりの作品からごく少数を選ぶのは、多くの作品を選外にせざるを得ないという点で苦渋に満ちた作業だった。私としては50点くらい残したいものがあった。全応募企画に対してそれぞれ短い覚書をしたためた上で臨んだ選考会議では、選考委員各自が真剣に臨んだが、投票が主体で、残念ながら十分な検討と熟議を経て入選作を決めたとは言い難い面があった。このため、一部の作品はその真価に気付くことのできないままに落選してしまったものがあると思う。これについては十分反省しつつ、今後の審査に心して臨みたい。また、野外展示や生物を含む展示など、意欲作ながら公募要領の規定を満たしていない点で採用できない作品が少なからずあったことは勿体なかった。とはいえ、選ばれた作品はどれも興味深く、どのように実装されるか早く見てみたいと思わせられるものばかりだ。キューブに実装される作品は、すべてリアルであり、リアルではない両義性として私たちの前に立ちはだかる。その一般的な前提を飛び越えて、刺さってくる体験を共有できる作品に出会えることを心待ちにしている。

二次審査講評

**多様なアプローチと成果を前に、どこに力点を置いて評価するのか、テーマとの整合性を
どの程度重視するのかなど多くの課題があり、紛糾とまではいかないまでも、様々な議論があった。**

大変な力作揃いで、まずは作者の方々、裏で奔走してくださった方々に心からお礼申し上げます。審査では、多様なアプローチと成果を前に、どこに力点を置いて評価するのか、テーマとの整合性をどの程度重視するのかなど多くの課題があり、紛糾とまではいかないまでも、様々な議論がありました。大賞作品の選出にあっても意見が相当割れました。河原の石を、集光された太陽光の熱で溶かし、地の下のマグマを想起させるプロジェクトについて、私は「今ココと壮大な地球史的時空間を詩的に切り結ぶ貴重な試み」と評価しました。
審査員賞に選ばせていただいた「橋」を巡る作品も、橋の狭義の機能から拡張し、抽象的なレベルまで含んで何かを繋ぎ、今ココと外部の関係性を開いていくポテンシャルの魅力と、地域に根差した地道なリサーチに惹かれました。ただ、どちらの作品も、本来持ちうる広がりや強度を十分に表現しきれていないのではないか、と僭越ながら感じてしまう部分もあり（私が見落としているだけかもしれません）、今後の発展・展開にも期待したいという意味で、推させていただきました。他にも「サカサゴト」、「One room」といった作品にも、大いに惹かれるところがありました。鑑賞者の方々は、受賞作かどうかに気をとられず、ぜひそれぞれの作品に触れて、心行くまで体感していただきたいと思います。

Photo by Hiroyasu Daido

北村 明子

ダンサー・振付家／信州大学人文学部教授

KITAMURA Akiko

Dancer and Choreographer/
Professor, Faculty of Arts, Shinshu University

一次審査講評

**アイデアは、“リアルのゆくえ”の可能性を無限に提示しながら
時空を漂っているようだった。**

多くの制限と緊迫が続いた２年と少しの後、踊ることの“リアルのゆくえ”を考えることが当たり前になった身体で臨んだ一次審査。企画書、マケット、映像を行ったり来たりしながら、直感と思考の網の目が重なり合うような瞬間、脳内でイメージするキューブの中で、まだ存在しない作品と、ダイレクトに繋がるような時間を過ごした。身体感覚や自明の秩序が、ずれていったり、歪んだり、ひっくり返されたりするアイデアは、“リアルのゆくえ”の可能性を無限に提示しながら時空を漂っているようだった。巡る思考が身体感覚へと表出し、それがまた思考へと戻されるといった循環運動を起こしているような、それは、ダンスと同じ現象のようにも思われた。直感を伴う体験で、身体感覚が変化する、思考、時空間、物質との接続。この体験はダンスの新たな感覚を切り開くことにもなるだろう。そして、実際の作品の存在は、それをどのように強化、または想像を超えたものへと飛躍してくれるのか、来年の4月への期待が大きく膨らむ。

二次審査講評

**CUBE・・・制限とも自由とも捉えることのできるお題目に、全く異なるアプローチを持つ作品群は、
一つや二つのテーマ性では収まらない多様性に満ちていた。**

CUBE・・・制限とも自由とも捉えることのできるお題目に、全く異なるアプローチを持つ作品群は、一つや二つのテーマ性では収まらない多様性に満ちていた。実作品の体験は、困ったことにほとんど全てが楽しく、“Award”であることを忘れかけた程。視覚性、物質性から時空を広げて思考を巡らせ、五感からイマジネーションの解放・飛躍を誘発し、ストイックな強度やセンスの良さは、より深い解釈の旅を促進する。これらの魔力は作家・作品と鑑賞者の間に生じるものであり、漂う幽霊を追いかける行為のように、確信を失いそうになる波もやってくる。自問自答を繰り返し、“ブレない判断基準”の探求という、喜ばしくも苦しい試練の中で、時間経過とともに掴めてくるものがあった。それは、作家がテーマと真剣に向きあった証跡が、鑑賞・体験者に浸透し、ここから出発する“リアルのゆくえ”とは、いかなるものとして共有され、それが何と、どのように、どこまで繋がり得るものか、と、粘り強くも軽やかにも、問いかけ続けてくる、完結し得ない対話の力だった。

四方 幸子

キュレーター・批評家／美術評論家連盟会長

SHIKATA Yukiko

Curator and Critic/
President, International Association of Art Critics, Japanese Section

一次審査講評

「リアル」へのアプローチは様々だが、いずれも人や社会、自然とのつながりを再接続しようとする意思が感じられた。

「キューブ」への挑戦に加え、応募段階から新型コロナウイルス感染症の只中となった今回、そのような時代を反映した「リアル」とそのゆくえが、多くの企画から感じられた。応募者名も住所も性別も知らされない本公募ならではの審査は、内容から応募者を想像し始める興味深い体験でもあった。応募は、現代美術を中心に建築やメディアアートも多く、絵画、彫刻、工芸など美術全般に加え、このような枠組みでは困難に思えるパフォーマンスも目立った。内容には、清流や石、美濃和紙や美濃焼など、岐阜の豊かな自然や文化に関わるものも多く見られた。最も印象的だったのは、ポストパンデミックそして直面する国内外の諸問題を受け止めようとする切実さである。「リアル」へのアプローチは、知覚認識や身体性を扱うもの、過去を振り返ったり、人間中心主義を相対化するなど様々だが、いずれも人や社会、自然とのつながりを再接続しようとする意思が感じられた。とりわけ日常から記憶や死など視えにくいものに寄り添ったり、自然環境や生態系にミクロ、マクロな眼差しで関係を持とうとする企画を評価した。加えて、ユーモアやシュールさによって混迷を突き抜けようとする企画も評価した。

二次審査講評

審査では、キューブや今回のテーマへのアプローチ、ビジョンの実現性を重視したが、何よりも作品が放つ力やメッセージを受け止めた。

各作品のレベルは高く、しかも多様で、全体で見応えのある展覧会となっていた。審査では、キューブや今回のテーマへのアプローチ、ビジョンの実現性を重視したが、何よりも作品が放つ力やメッセージを受け止めた。各審査員の観点は示唆に富み、活発な議論が交わされた中、大賞については意見が分かれた。その結果選ばれた千葉麻十佳作品は、川で拾った石を太陽熱で溶かし「マグマに戻す」もので、溶ける石の映像や音の生々しさとともに岐阜から地球史や地球深部へと至る、ささやかながら鮮烈で壮大なまなざしによる。石から地球の連綿とした営みへ「リアル」を接続することで、想像力を喚起するとともに人間の立ち位置を問いかける側面を評価した。
審査員賞の北川純作品は、キューブを即物的に「箱」と見立て、コロナ禍の生活をモノの側から提示した。来場者が搬送物になる体験を提供することで、私たちはショッピングをしているようで実はさせられているのでは、と思わせるドライなユーモアが効いていた。

寺内 曜子

美術家

TERAUCHI Yoko

Artist

一次審査講評

キューブを美術館展示室内に入れ子として展示するという二重構造は実は展示空間としては、とても難しい。

この公募展が他の公募展とは異なる１番の特徴は自立した大きなキューブという物体の存在だと私は思う。幅4.8 × 奥行き4.8 × 高さ3.6メートルの木製のキューブを自由に使えるという機会はなかなか得ることはできない。なので、自立したキューブ自体の存在を意識した作品企画かどうかを選考の基準とし、私個人の選択を行った。応募企画の多くは、キューブの内部空間に作品を「収める」ことを基本としたものに私には見えたが、規定の空間内に物や状況を収めるだけならば、何も自立したキューブがなくとも、美術館の室内で旧来通りの展示で済むのでは、と思われる。AAICの条件である、内部空間を持ったキューブを美術館展示室内に入れ子として展示するという二重構造は実は展示空間としては、とても難しいと私は思う。最終選考には残らなかったが、そのあたりを意識した企画も少数ながらあり、各々が独自の切り口で「キューブの実在」と取り組んでいて、興味深かった。一度ここまで応募条件を狭めても面白いのではと思った。

二次審査講評

今回の審査を終えて、この大きな自立するキューブから「必然的に生まれた」作品を見てみたい気持ちがより強くなった。

入選した14点は、個々の作品のアプローチや表現が違うので、ヴァラエティーの多さを楽しめる展覧会となっていると思う。その中から大賞を選ぶのはとても難しかった。審査員同士の正直な意見を交わして、丁寧に審査出来たのは良かったと思う。
私自身は各作家の「リアルのゆくえ」の内容を云々するよりも、①各作家が自分の信じる「リアル」を、言葉の助け無しに見ただけで伝わる説得力ある作品として完成させたか、②キューブを内側空間だけでなく外側空間もどう使っているか、を判断基準とした。
この基準②から外れた作品の中にも、完成度の高い作品は何点かある。キューブの制約を外すとより良くなっただろうと思われる作品もある。テーマを重視するかキューブを重視するかも作家及び審査員の意見の分かれるところだ。
私は今回の審査を終えて、この大きな自立するキューブから「必然的に生まれた」作品を見てみたい気持ちがより強くなった。

森村 泰昌

美術家

MORIMURA Yasumasa

Artist

一次審査講評

芸術は優劣じゃない。
ではなんだろうかと悩むのが芸術です。

審査、苦手です。というのも芸術って元来、バトルとは対極にある領域だからです。芸術的価値を点数で推しはかるのは無理があるんです。作品同士を戦わせ勝敗を決めるなんていうのはむしろ邪道です。でも応募者全員を採用するわけにはいかないのですから、審査員としての私は何かを選ぶことになるわけで、だから「どうも苦手だな」とつぶやくことになってしまいます。
どうしようかと考えて、結局つぎの一点だけを頼りに選ばせていただきました。それは「これ見てみたい」という、一種の賭けみたいな判断基準です。応募された未来予想図を拝見して「これホントに実現できるのかな」とか、「ひとをバカにしたような提案だ」とか、そういう予測不可能性に遭遇すると、思わず「それ見てみたい」と前のめりになってしまいます。そこに賭けました。
なんども言います。芸術は優劣じゃない。ではなんだろうかと悩むのが芸術です。応募者全員のこの試行錯誤に、惜しみないエールを送りたいと思います。

二次審査講評

審査員は出品者のジャッジメントではなく、むしろ共犯者であると思いたい。

作品を作る。不思議な営みだ。我々はなぜこんなことをするのだろう。審査をしながらずっとそのことを考えていた。入選者14組の作り手たちは、みんな大変な苦労をしている。私もひとりの作り手なのでそれがわかる。だからみんなに賞をとってほしい。でもそれはできない。芸術の評価はスポーツのように数値で明確には表せない。輪郭線がぐにゃぐにゃ変わるおかしげなジグソーパズルのようで、そのとき次第でピタッと当てはまるピースの形がちがってくるらしい。芸術はたぶんAIにも予測が不可能な未知の領域なのだ。ざまあみやがれとちょっと勝ち誇った気分に審査員の私はなれたが、14組のみなさんには申し訳なく思う。ちょっとしたはずみで、誰が受賞するかがガラリと変わるからである。その予測出来ないスリリングな瞬間に審査員の私は立ち会えたが、それは神様の気まぐれで人の一生を左右するような不条理でもあっただろう。この不条理をかいくぐり、喜びにも落胆にも、まあこんなものだろうと鷹揚にかまえ、それでも自分はなぜこうして作品を作り続けているのかと問う。そういう芸術の仲間でいてほしい。審査員は出品者のジャッジメントではなく、むしろ共犯者であると思いたい。

山極 壽一

総合地球環境学研究所所長

YAMAGIWA Juichi

Director-General, Research Institute for Humanity and Nature

一次審査講評

新しい技術は変革を重ねて古い技術を駆逐していくが、
アートは原初の香りを常にどこかに漂わせている。

アートとはそもそもリアルではない。それは言葉とは違うナラティブである。言葉が世界を切り分けて意味を与えるのに対し、アートは無意識の世界を揺らし、変質させる。二つの異なるナラティブがパラレルワールドを構成する。私たちはその間に浮かぶ。ただ、これまでのアートはリアルな世界とどこかでつながっていた。しかし、情報通信技術の進歩はその接続を外し、虚構の領域を拡大した。今回のテーマは現実とのつながりが曖昧になったアートをCUBEという小宇宙に解き放つ。それがどんな形となるのか。新しい技術は変革を重ねて古い技術を駆逐していくが、アートは原初の香りを常にどこかに漂わせている。その奥行きのどこかに人間がたどってきた足跡を感じ取ることができるのだ。その期待を込めて、今期の作品群を眺めてみると、リアルな世界に対する信頼が急速に薄れ始めていることがわかる。さて、そこから私たちは未来を感じ取ることができるだろうか。

二次審査講評

作品それぞれがとても個性的で評価をつけるのが難しかった。
大きく自然に題材を求めたものと人間の内面に入り込んだものとに大別できるように思う。

入選した作品それぞれがとても個性的で評価をつけるのが難しかった。大きく自然に題材を求めたものと人間の内面に入り込んだものとに大別できるように思う。大賞の作品は、地球の表層に生きる私たちにその下を流れるマグマの有様を、岐阜の川の石から歴史を遡ることで示してくれた。
面白いと思ったのはJK in the street.で、リアルの行方の中心にいるのは実はJK（女子高生）ではないか。子供と大人の中間にいて「思春期スパート」のまっただ中にいる。心も身体も急速に成長する。変わっていく社会観、人間観の中で自分を見つめなければならない。本作品には、そんなリアルと反リアルのただ中で立ち止まり、もがいている姿がよく描かれている。「ふつうの」に込められた意味が二重に迫ってくる。「ふつう」を装いながら、その裏に隠れている願望が透けて見える。「違う」、「ウソばっかり」と叫びたくなる自分がいる。全編を流れる願いや現実を、あっさりとエピローグでひっくり返してしまうドンデン返しがすばらしい。作者の演劇的才能の高さがうかがえる。これを機会に大きく飛躍してほしいと思う。

Chapter

1

Catalogue

第1章
図 版

	Artist / Title	Prize
019	INAGAKI MOMO 《JK in the street.(普通の女子高生)》	山極 壽一 賞
023	大西 康明 《石と柵 岐阜》	入選
027	岡 ともみ 《サカサゴト》	入選
031	奥中 章人 《INTER-WORLD/SPHERE: Over The Cube》	北村 明子 賞 寺内 曜子 賞
035	北川 純 《ネットショッピング》	四方 幸子 賞
039	GengoRaw(石橋友也+新倉健人) 《バベルのランドスケープ》	入選
043	小孫 哲太郎 《NAGAMERU》	森村 泰昌 賞
047	柴田 美智子 《触れるもの、絶対に触れないもの》	入江 経一 賞
051	身体企画ユニット ヨハク 《スクランブル交差空間 ―不干渉の調和―》	入選
055	千田 泰広 《Aftereal 6》	入選
059	千葉 麻十佳 《Melting Hida Mountains》	大賞
063	古屋 崇久 《橋の形》	岩崎 秀雄 賞
067	florian gadenne + miki okubo 《アンブレラ種》	入選
071	山本 雄教 《One room》	入選

凡例
Notes

・清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2023の出品作品を掲載した。
・制作年は、すべて2023年である。

山極壽一 賞

Title
JK in the street.(普通の女子高生)
JK in the street.(tadano joshikosei)

Artist
INAGAKI MOMO
イナガキ モモ

ただのありのままの女子高生の「いま」を、小さな悲鳴とも言えるつぶやきメッセージと共に表現した記録映像作品。プロジェクターで投影された3壁面から「いま」の「普通」の「JK」の「リアル」な「日常」の映像と声が、キューブ内いっぱいに広がり体感できる。

This work is like a documentary video that captures the "now" of an ordinary high school girl (joshi kosei in Japanese, hence "JK") just the way she is, along with her whispered message that could also be a small scream.
Images and voices projected onto three walls fill the entirety of the Cube, allowing visitors to experience the real, daily life of an ordinary JK now.

JK on the Street

それがわたし

奉納
朝日稲荷大神

JK on the Street

INAGAKI MOMO

イナガキ モモ

2006年 愛知県生まれ。愛知県拠点。
Born in Aichi Prefecture in 2006 / Based in Aichi Prefecture.

2021 | 愛知県立旭丘高等学校美術科 入学
2022 | ナゴヤイノベーターズガレージ（名古屋市＆中部経済連合会）公認アンバサダー就任。Z世代への広報活動に従事

主な受賞歴

2020 | 姉妹都市児童絵画 優秀賞/愛知県

〈作品制作協力〉

プロジェクター：テクノホライゾン株式会社 エルモカンパニー
椅子：株式会社メトロポリタンギャラリー
音楽：株式会社Room 若林尚
ロゴ：QUALLIA inc. 鬼頭誠

Artist's Comment

ーアートによる社会問題の「自分ごと化」ー
幼い頃から幾度も美術館に足を運んでいる中で、社会問題をテーマにした作品に出会い興味を持った。映像や空間に作品として社会問題への訴えを落とし込むことの力を感じ、私の根底に「アートが社会問題について考えるきっかけを生む」という考えが生まれた。私たちの世代はコロナで青春のさまざまなシーンとなるはずの思い出が奪われ、漠然とした不安が常に心の中に張り付いている中で、淡々と今を生き、何も見えない将来に向かって準備を進めている。そんな普段は見過ごされてしまうような社会問題をとりあげた作品により、人々に考えるきっかけを提供し「自分ごと化」させられるアートのあり方とは何かを深究したいと思い、本作品を作り上げた。

Title

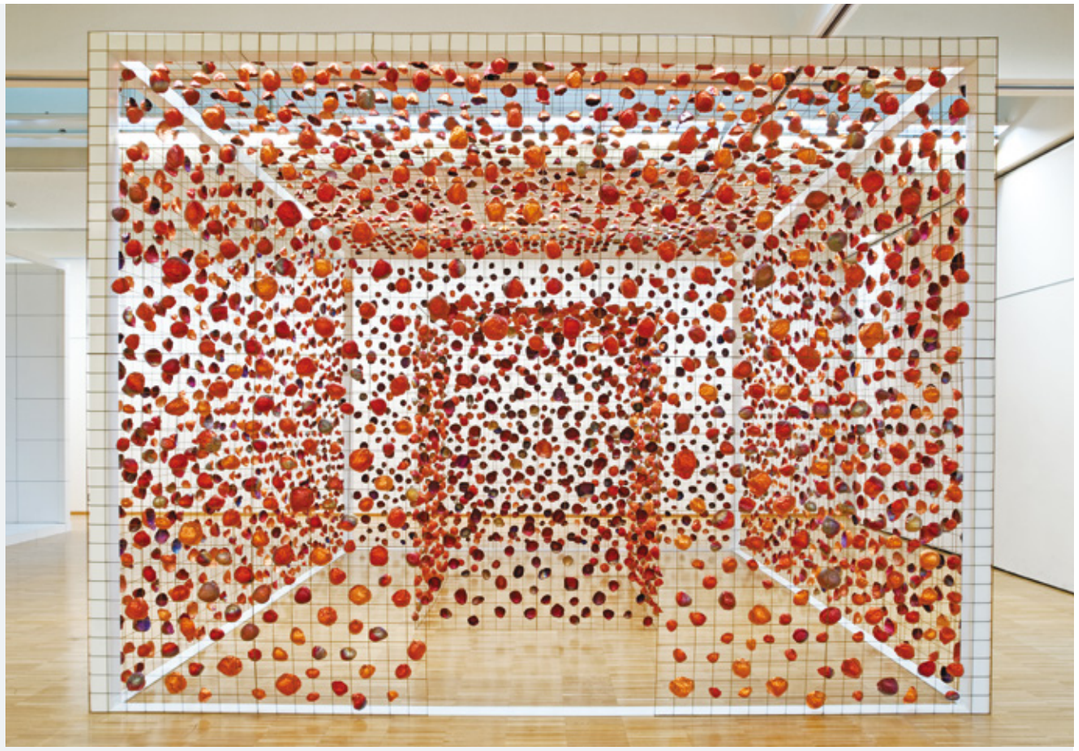
石と柵 岐阜

Stone and Fence Gifu

Artist

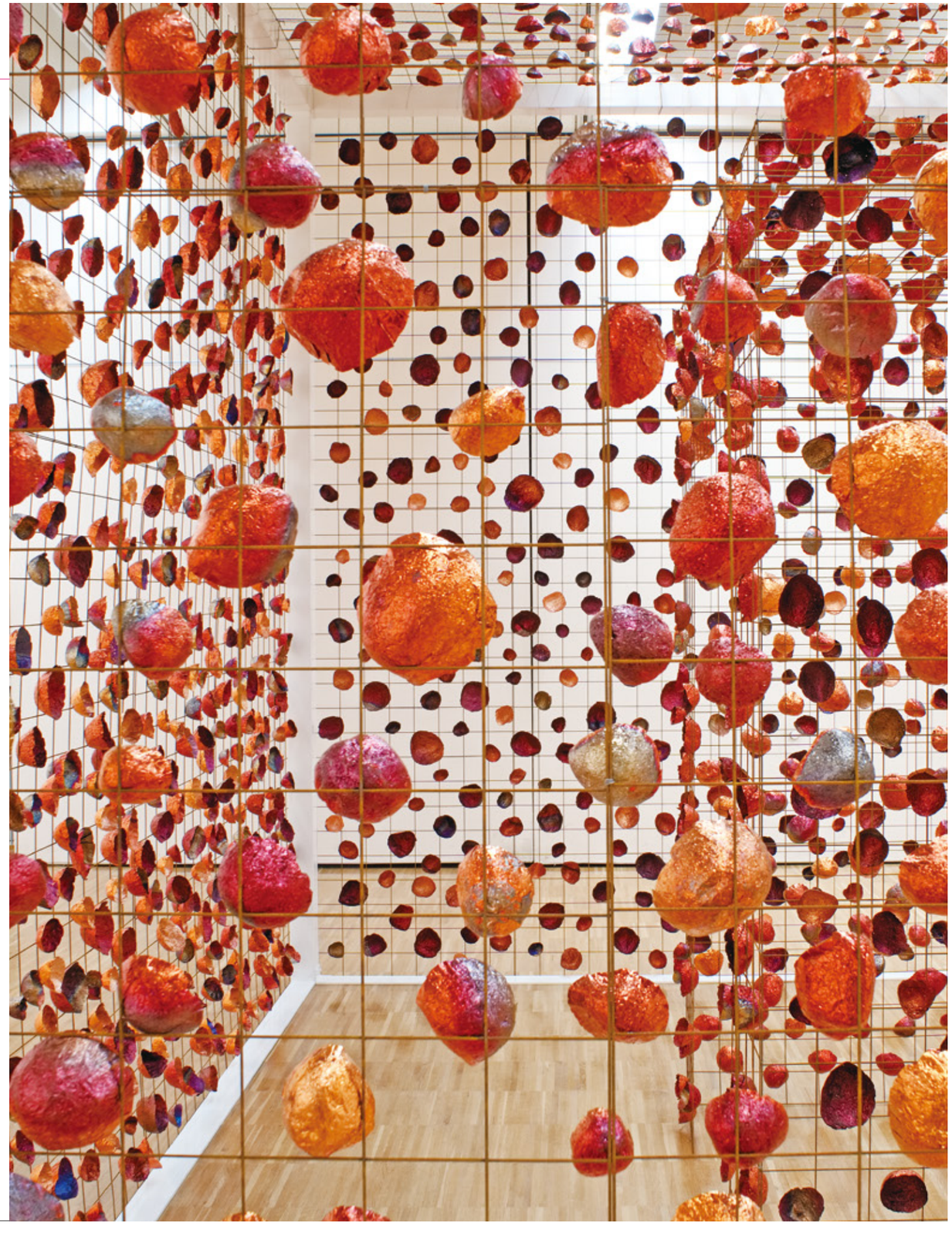
大西 康明

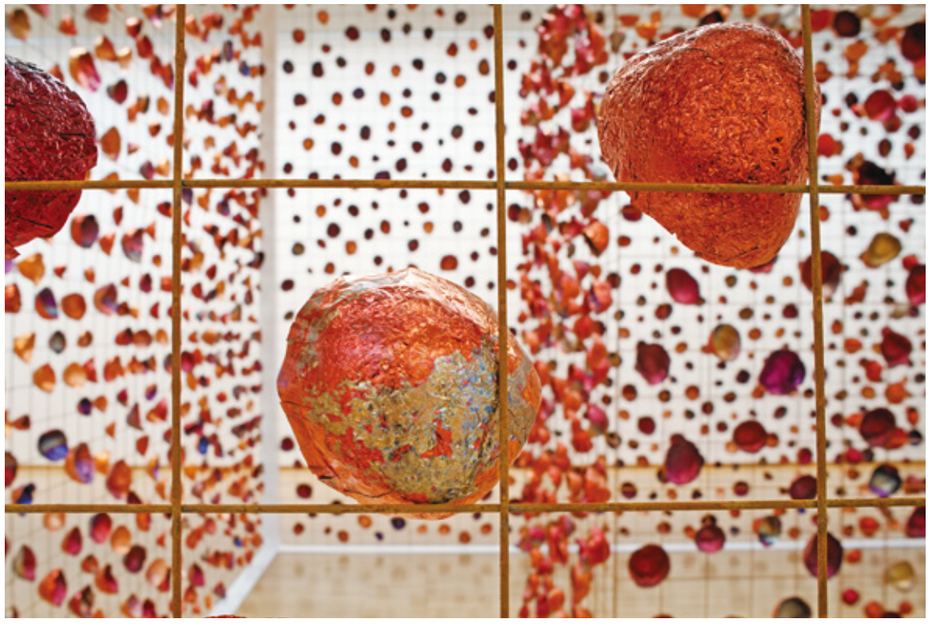
ONISHI Yasuaki



時間の堆積を象徴する石の形態を借り、河原全体をトレースする作品。銅箔で石を覆い、石を取り出して形を作るシンプルな方法から、大きな塊であり空洞の彫刻を制作する。
河原をトレースするという無謀にも思える行為はこの世界を認識する手がかりであり、そこから彫刻を作り出すことがリアリティです。

This work is a trace of a river bank with different forms of stones, which symbolize the accumulation of time. A large mass that is also a hollow sculpture is produced by the simple method of creating forms by covering stones with copper foil and then removing the stones. The seemingly reckless act of tracing a river bank is a clue to understanding this world, and creating a sculpture through this process is my reality.





大西 康明
ONISHI Yasuaki

1979年 大阪府生まれ。大阪府拠点。
Born in Osaka Prefecture in 1979 / Based in Osaka Prefecture.

2001 | 筑波大学芸術専門学群技術専攻 卒業
2004 | 京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了
2007 | 第1回秀桜基金留学賞によりヨーロッパに滞在
2011 | ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスにて研修

主な受賞歴

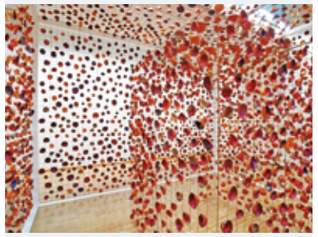
2007 | 第10回岡本太郎現代芸術賞展 太郎賞
2014 | 咲くやこの花賞 大阪市

主な展覧会

2017 | 「個展」空間の緑/アートコートギャラリー/大阪府
2018 | 水と土の芸術祭/万代島多目的広場/新潟県
| The Moon/ルイジアナ近代美術館/デンマーク
2019 | Negative Space/ZKM/ドイツ
2020 | Writing of Light/National Taiwan Museum of Fine Arts/台湾
2021 | 高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.09/高松市美術館/香川県
2022 | KYOTO STEAM 2022/京都市京セラ美術館/京都府

〈作品制作協力〉

福田金属箔粉工業株式会社



Artist's Comment

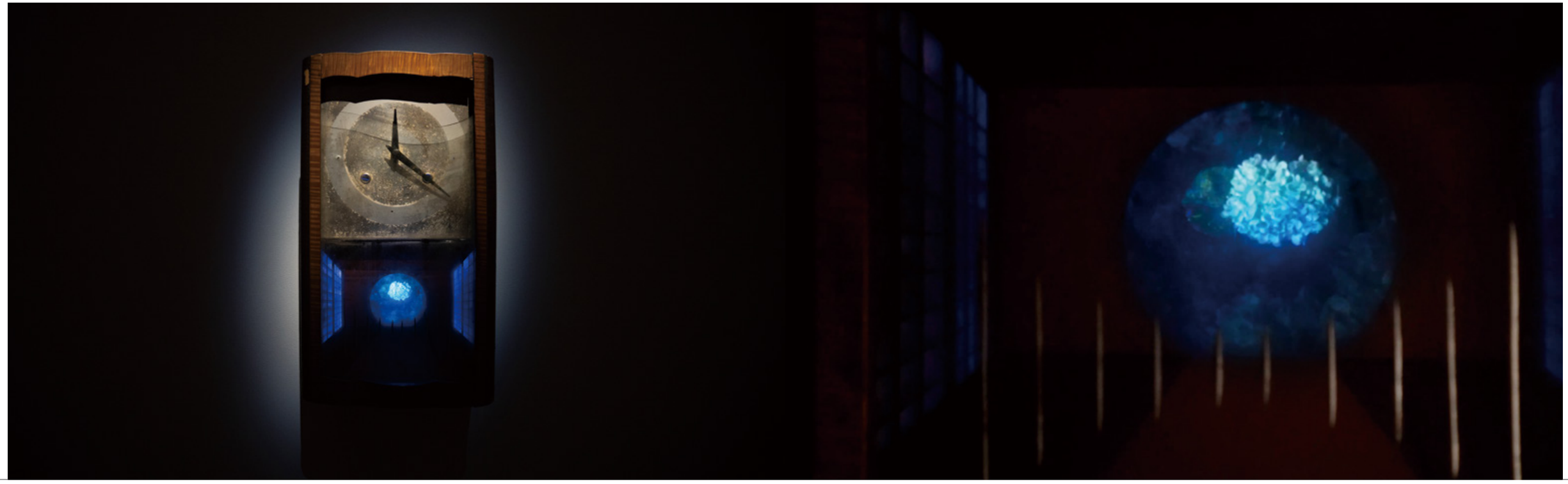
フェンスを二重構造に設置しキューブの中に小さいキューブを置く作品を見てみたいと思い立ちました。一つ目の外側のキューブに入ると外の層と中の層の両側の石の型に挟まれるように配置しています。外側からも内側からも視線が浸透していくような感覚や、異なる層の型が一つの石として合わさるような発見が得られることで新しい風景が見えてくることを期待して制作しました。

Title
サカサゴト
Sakasagoto -Inverted Ordinary Life-

Artist
岡 ともみ
OKA Tomomi

本作品では古時計の盤面は反転し、針は逆回転している。古時計が反転する時、忘れ去られようとしている葬送の風習を思い出すように、内部の映像が再生される。亡くした人やあの世のことを、生者の誰もがリアルに感じることができない。だからこそ、あの世やあの世への道を想像し、手に取ろうとする。それを想像しようとする営みそのものが、死を自身の中にリアルなものとして受け入れるそれぞれの儀式になっていくのかもしれない。

In this room, the faces of actual clocks are reversed, their hands turning backwards. When these old clocks run in reverse, images play within as if to remind us of funeral customs all but forgotten. No one alive can really sense those who have departed, or the afterlife, which is why we try so hard to imagine the next world, and the path leading there, and bring them within our grasp. Perhaps the very endeavor of that imagining is what informs the rituals that let us accept within ourselves the reality of death.



第1章 図版
サカサゴト ― 岡ともみ

岡 ともみ
OKA Tomomi

1992年 東京都生まれ。東京都・岡山県拠点。
Born in Tokyo in 1992 / Based in Tokyo and Okayama Prefectures.

2018 | 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科 卒業
2019 | ベルリン芸術大学 留学
2022 | 東京藝術大学美術研究科 修了
現 在 | 同研究科博士後期課程 在籍

主な受賞歴

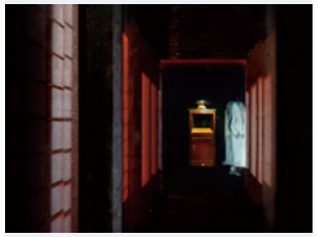
2022 | 三菱地所賞/日本/東京
第16回shiseido art egg入選/日本/東京

主な展覧会

2018 | 個展「どこにもいけないドア」/art space Kimura ASK?P/東京
オープン・スペース/インターコミニュケーションセンターICC/東京(~2019)
2022 | 個展「誰そ彼時の部屋」/art space Kimura ASK?P/東京
shiseido art egg 岡ともみ展「サカサゴト」/SHISEIDO GALLERY/東京

〈作品制作協力〉

技術協力:tettou771
サウンド:小林有毅
制作協力:遠藤純一郎



Artist's Comment

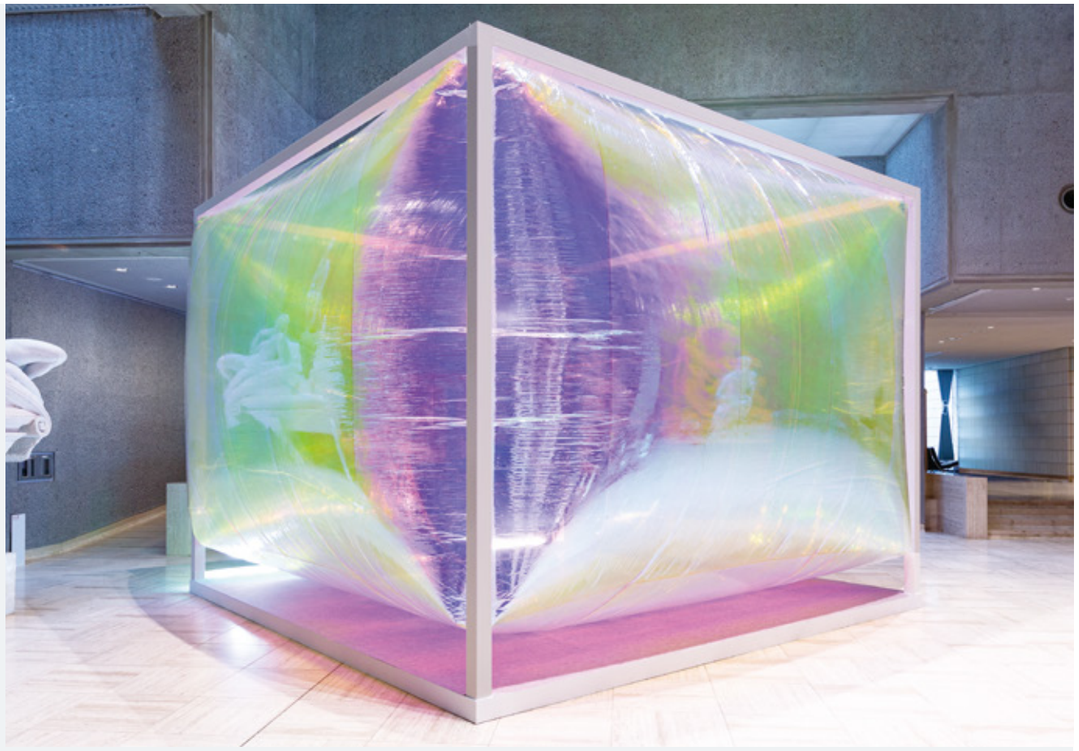
大きなブラックボックスにもできるキューブという展示空間は、若手作家にとっては実はとても貴重な空間です。特にグループ展などでは、ブラックの個室空間を自身のために用意してもらうには、かなりの予算がかかるため、大きさを縮小したり、明るさや音などの面でも妥協しなければならないことが多いためです。今作「サカサゴト」は他の場所でも展示したことのある作品ではありましたが、初の試みとして、CUBEの正方形に近い形を活かし、時計を回廊上に配置しそれを取り囲む壁には映り込みの出る仕掛けを仕込みました。ここでしかできない作品の新たな展開を作れたことは、私にとっても作品にとってもとても幸せな経験になりました。

北村明子 賞

寺内曜子 賞

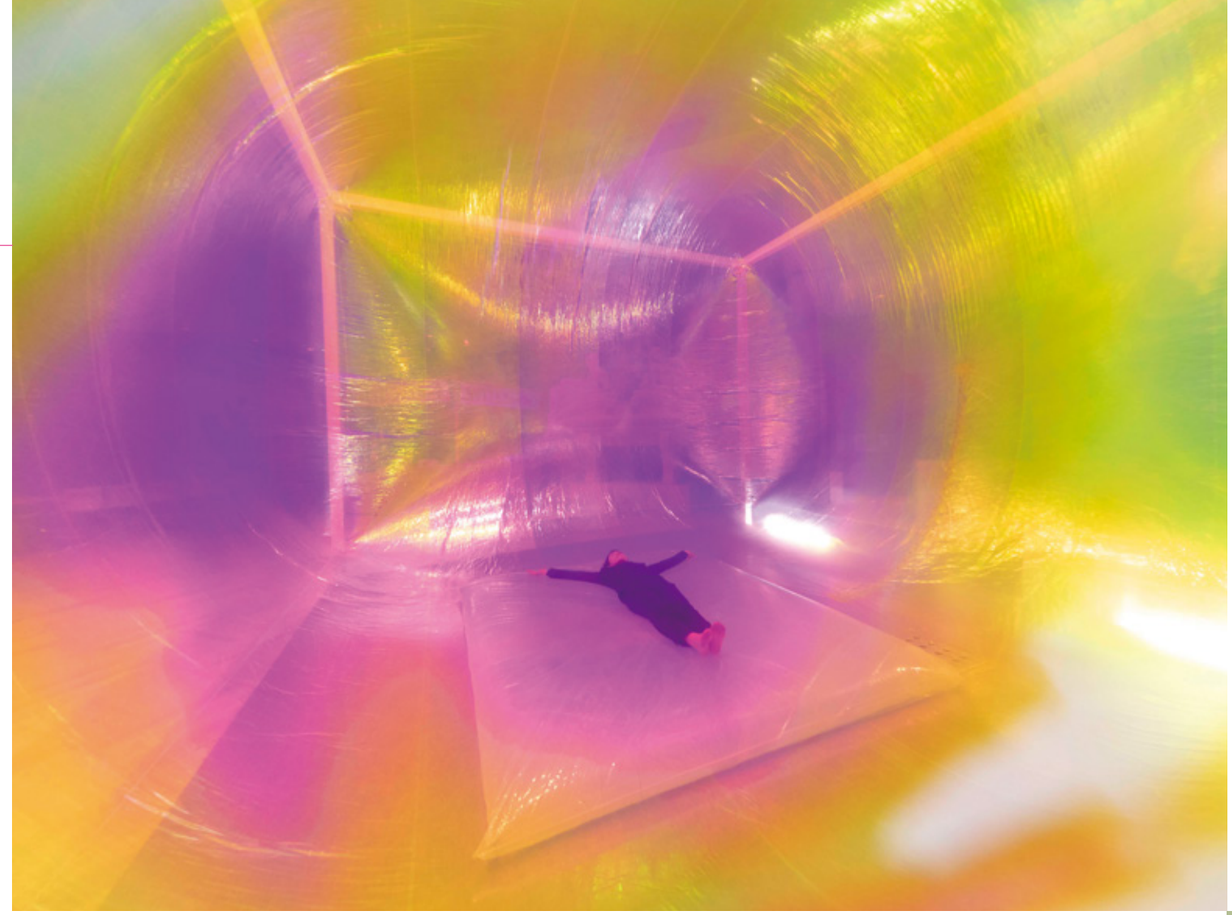
Title
INTER-WORLD/SPHERE: Over The Cube
INTER-WORLD/SPHERE: Over The Cube

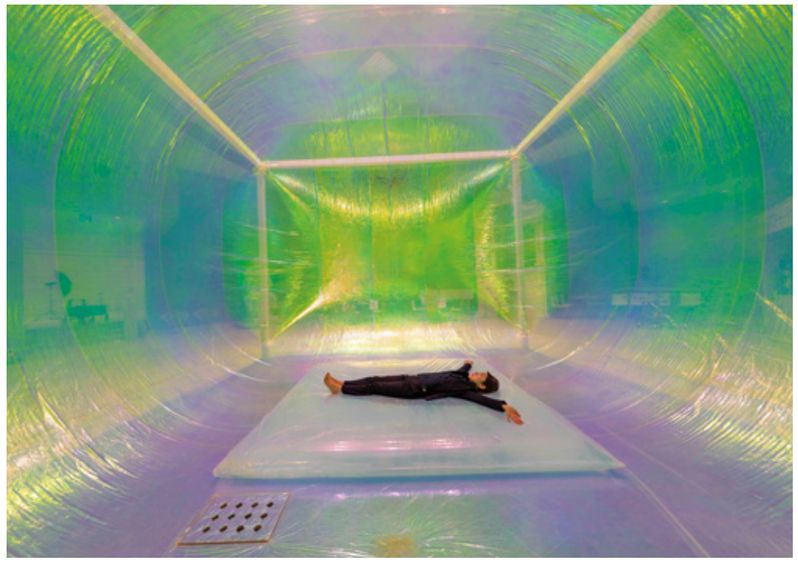
Artist
奥中 章人
OKUNAKA Akihito



キューブをはみ出すように膨らむ虹色透明風船。中に入ると鑑賞者は床に敷かれた水面の上に寝転がることができる。仰ぎ見ると、たゆたう鏡面世界が広がり、人の存在が、水、空気、光の膜を通じて環境に干渉し揺らめく。光源や角度で色合いが変化する作品の表象は、自己の変動性や多面性、人間の多様性社会を肯定し、また空気や水、光を通じて環境の重要性を暗示している。

A rainbow color transparent balloon swells up, bulging out of the framework of the Cube. Inside the Cube, a visitor can lie down on the surface of a water mattress on the floor. From that position, the visitor can look up at the universe of wobbling mirrors reflecting images of the quivering human presence on the environment through the films of water, air, and light.This work, which produces reflections that change in hue depending on the sources and angles of light, affirms the variability and multifaceted nature of one's self and the diversity of human society while suggesting the preciousness of the environment with air, water, and light.





奥中 章人
OKUNAKA Akihito

1981年 京都府生まれ。京都府拠点。
Born in Kyoto Prefecture in 1981 / Based in Kyoto Prefecture.

2004 ｜ 静岡大学教育学部 卒業

主な受賞歴

2016 ｜ 木津川アート賞グランプリ+市民賞/京都/日本
2017 ｜ 六甲ミーツ・アート主催者特別賞/兵庫/日本
2019 ｜ 野村財団 2019年度下期芸術文化助成/東京/日本
LUXELAKES A4美術館ARIE国際レジデンスプログラム/成都/中国
2020 ｜ パブリックリソース財団文化・芸術・スポーツ分野助成基金/東京/日本

主な展覧会

2017 ｜ モスクワ国際ビエンナーレ・Parallel Program《Yearning for The Sky》/ARTPLAYデザインセンター/モスクワ/ロシア
アートで解明！空気の正体/川口市立アートギャラリー・アトリア/埼玉/日本
2018 ｜ TaeHwa River Eco Art Festival 2018/Teahwa River Grand Park/ウルサン/韓国
2019 ｜ ShenZhen Happy Island Project/OCT Harbor/深セン/中国
2021 ｜ 北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs/東田大通り公園/福岡 /日本
FUJI TEXTILE WEEK 2021 -織りと気配- /富士吉田市/山梨/日本
個展・プレBIWAKOビエンナーレ《INTER-WORLD》/旧伴家住宅/滋賀/日本
Dmitry Alexandrovich Prigov:DistantPlanets/アートギャラリーエリツィンセンター/エカテリンブルグ/ロシア
2022 ｜ Study:大阪関西国際芸術祭/グランフロント大阪/大阪/日本
誰もがWonderfulアート/静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ/静岡/日本

〈作品制作協力〉

協賛社：住化積水フィルム株式会社、株式会社寺岡製作所、株式会社ホログラムサプライ、木津川市山城総合文化センター、あおいおあ
協力者：Aimo、akira_you、中室健、成田貴亨、西川元晴、吉川賢、船越鈴賀、山本瑞穂、よこうちともひろ、李雨潔、王昊天

Artist's Comment

私の作品は空気と水と光で作られていますが、これらを素材として扱っていると、まるで私達／人間の在り方や振る舞い方にとても似ていると感じることがあります。子供達と太陽熱気球あそびをする時のお話で「僕たちの心が温かくなると、宙に浮くような気分になるのと同じで、空気さんも温まるとお空に浮いていくの」
人が数百万年も空気と水と光に包まれ育まれた存在だから、私達の見えない関わり合いの姿もここにあるのかもしれません。

四方幸子 賞

Title
ネットショッピング
Online shopping

Artist
北川 純
KITAGAWA Jun

ネットショッピングという行為が日常化し、近年のコロナ禍によりその勢いは増加の一途を辿るのみである。巨大ダンボール箱が横転し、地面に沈み込んだ状態がキューブの規定サイズとなっている。その蓋の隙間から鑑賞者が出入りできる。内部空間では鑑賞者自らがシュリンク梱包された商品になってしまうような体験が待ち受けている。

Online shopping has become an ordinary daily act, spreading greatly during the recent pandemic.
A giant cardboard box (associated with online shopping) turned on its side and sinking into the ground fits the space of the Cube. Visitors can go in and out of it through the opening. Inside, the experience of feeling like shrink-wrapped goods awaits.

北川 純
KITAGAWA Jun

1965年 愛知県生まれ。山梨県拠点。
Born in Aichi Prefecture in 1965 / Based in Yamanashi Prefecture.

1986 | 多摩美術大学立体デザイン科卒業
建築会社を経て美術制作開始。
主な作品/裸体像Tシャツ計画・ジッパーシリーズ・巨大バルーンシリーズ
個展、グループ展ほか公共空間やアートイベント、美術館で作品を発表する

主な受賞歴

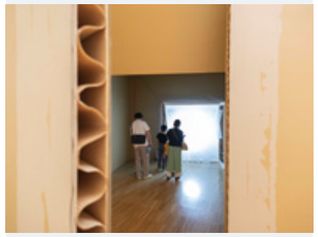
2003 | キリンアートアワード2003/奨励賞受賞/東京
2007 | 小田原市ストリートアートコンペ/グランプリ受賞/神奈川
2015 | 六甲ミーツアート大賞準グランプリ受賞/兵庫
2020 | AAIC2020/藤森照信賞受賞/岐阜

主な展覧会

2010 | No Man's Land /旧フランス大使館別館/東京
2014 | さっぽろアートステージ/北海道
2021 | かけがわ茶エンナーレ2020+1/静岡

〈作品制作協力〉

レンゴー株式会社



Artist's Comment

最初の紹介インタビュー動画の撮影の際、話の流れで「ダンボールから行列が伸びている様子を見てみたいな。でもそれじゃゆっくり鑑賞してもらえないだろうから良くないか。」などと冗談混じりで呟いたのでした（本編ではカットされていましたが）。その希望と心配が現実のものとなった時には正直驚きました。その事自体の是非は多々あると思いますが、通常私の経験している現代美術展での注目度の低さから比べると異例の体験であったと言えるでしょう。もう一つの異例としましてはボランティアさんの充実度です。制作時には多くの方々に手伝って頂きました。私の作品の50%は彼らの手によって出来上がっているのではないでしょうか。要するに私は半分ぐらいしか作ってません。楽させてもらった上に、賞金だけ独り占めしてしまって申し訳ありません。

Title
バベルのランドスケープ
Landscapes of Babel

Artist
GengoRaw（石橋 友也＋新倉 健人）
GengoRaw（ISHIBASHI Tomoya＋NIIKURA Kento）

認知科学分野の研究成果に基づき、ランドスケープから文字、文章、声が生まれる光景を作り出す映像インスタレーション作品。
我々の世界認識の根底をなす「日常で目にする風景」と「言語」という一見関連性のないと思われる２つの要素を接続することで、今ここに存在する我々のリアリティに揺さぶりをかける。

This visual installation is based on the results of cognitive science research creating scenes where letters, texts, and voices emerge from landscape images.
This work connects two elements that are seemingly unrelated but in fact constitute the foundation of our perception of the world, "scenery we see in everyday life" and "language," shaking up our reality that exists here and now.

首脳が大衆の命
考えてる訳な

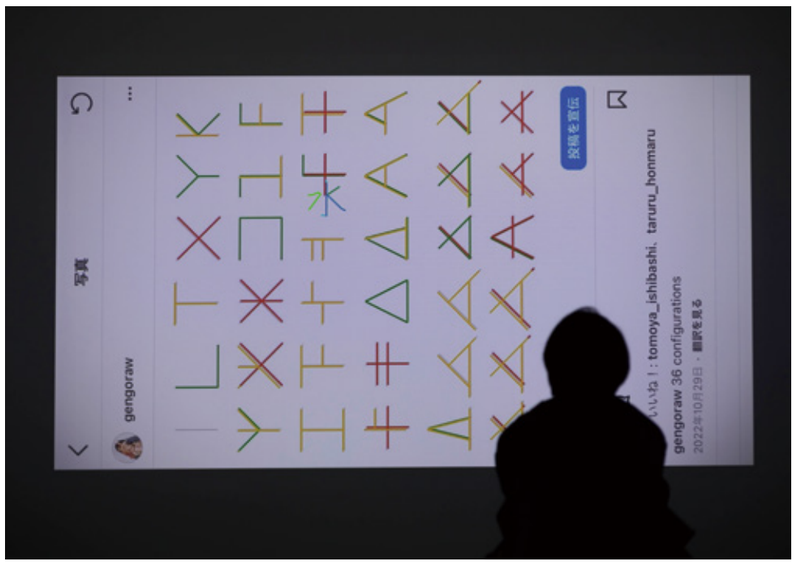


写真
gengoraw
投稿を宣伝
gengoraw 36 configurations
2022年10月29日 · 翻訳を見る

ただちに人体に影響
及ぼす数値ではな

GengoRaw(石橋 友也 + 新倉 健人)

GengoRaw(ISHIBASHI Tomoya + NIIKURA Kento)

石橋 友也:1990年 埼玉県生まれ。新倉 健人:1989年 東京都生まれ。東京都拠点。
ISHIBASHI Tomoya : Born in Saitama Prefecture in 1990 / NIIKURA Kento : Born in Tokyo in 1989 / Based in Tokyo.

石橋 友也

2014 | 早稲田大学大学院電気・情報生命専攻 修了

新倉 健人

2014 | 東京工業大学大学院理工学研究科数学専攻 修了

GengoRaw(石橋 友也 + 新倉 健人)

2018 | アーティストの石橋友也とエンジニアの新倉健人により結成

主な受賞歴

2019 | WIRED CREATIVE HACK AWARD グランプリ/日本
2021 | 第24回文化庁メディア芸術祭アート部門 審査委員推薦作品/日本
2022 | 第25回岡本太郎現代芸術賞 入選/日本/神奈川県

主な展覧会

2021 | 人工知能美学芸術展 美意識のハードプロブレムアンフォルメル中川村美術館他/長野県
　　個展「コトバノキカイ」/TOKAS hongo/東京都
2022 | 六本木アートナイト/六本木イグノボール/東京都

〈作品制作協力〉

アニメーションプログラミング:吉田竜二

Artist's Comment

様々なジャンルのアーティストが、同じフォーマットのなかで一堂に会する面白い展示である。作品や作家との交流を通して、作品を作ることに対する様々な解釈や議論ができ、自分達の視野が広がった。今回は大規模なプログラムを一から作るというチャレンジングな作品で、制作期間も構想からふまえると約1年かかっている。今回いただいた機会は一つの形を作り上げるという意味で我々にとってかなり有り難かった。また今後この作品にはブラッシュアップする余地があると思っているので、鋭意表現と開発力を磨いていきたい。

森村泰昌 賞

Title

NAGAMERU

NAGAMERU

Artist

小孫 哲太郎

KOMAGO Tetsutaro

いく本ものテープで遮られた空間。作品自体がフィルタとなって遮られているという、視覚と感覚が混在するような、場所。
見るという事と見えるという事が変わりつつある今だからこそ、日常で使われている単純な素材でフィルタを作り、人の視点の内側と外側を、心の感情を、見たり、見られたり、そんな物事を感じてもらいながら楽しんでほしい。

This work is a space demarcated by numerous strips, a place where the visual and the sensory are intermingled, with the work demarcating itself and serving as a filter at the same time.
As what it means to look and to see is changing today, I wanted to create a filter with simple everyday materials to enable visitors to see and show the inside and the outside of their perspectives and what they feel in their hearts while feeling and enjoying such actions and emotions.

小孫 哲太郎
KOMAGO Tetsutaro

1974年 東京都生まれ。埼玉県拠点。
Born in Tokyo in 1974 / Based in Saitama Prefecture.

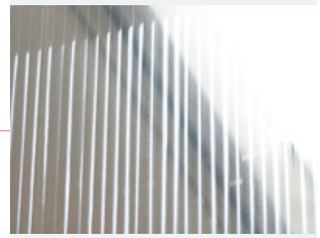
1993	本郷高校デザイン科 卒業
1999	沖縄県立芸術大学陶芸専攻 卒業
	糸満工芸陶苑 就業(〜2001)
2004	千葉県いすみ市に開窯
2016	埼玉県ときがわ町に移転し、制作活動中

主な受賞歴

2022 | 第2回壺1GP/白白庵/東京・南青山/グランプリ受賞

主な展覧会

2018	ロシア・セラミックシンポジウム/ガブリロフ・ヤムinロシア'18
2019	ロシア・セラミックシンポジウム/ペルムinロシア'19
2020	リトアニア・西会津アーチスト交換プログラム/西会津NIAVとリトアニアAnyksciai nenuinkvbatorius(AML)
2021	望郷哲太郎/すみだ向島EXPO/京島クロスロード/黒田区京島
	優・慶・快・楽　小孫哲太郎作陶展/日本橋三越/東京・日本橋



Artist's Comment

ただただセロハンテープ(幅15mm使用、約200輪、総距離約700m)を約2000回、脚立を200回昇降して張り巡らせた、私の作品「NAGAMERU」。AAIC全会期を通じて痛感した自分の頭脳経験値や寛大さや計画性の不足、CUBEを利用して空間意識や隔てられてしまう意識、さらにもありますが、私本人に会えた時、聴いてみてください。「見観視診看覧」(全てミルという意識の漢字なんです。)思いの通りに感じて鑑賞してもらう事が烏滸がましかった。想定外の事が多々で驚きばかりであっただが、今回のテーマ(リアルのゆくえ)に救われた気がする。そして、より一層「NAGAMERU」を考えるようにもなれた。

入江経一 賞

Title
触れるもの、絶対に触れないもの
Things that can be touched, things that can never be touched

Artist
柴田 美智子
SHIBATA Michiko

箱庭に見立てたキューブの内に、心の物語に現れるたくさんの猿達と、虚構を共有することで知らぬ間に閉じ込められた人間の雛型を置く。物語によって触れ得るリアルと、目に見えない檻によって引き離されてひび割れてゆくリアルは通底するものなのか？

Inside the Cube, which is presented as a miniature garden, are arranged many figures of monkeys that are characters in a story of the heart and human figures trapped there without being aware through the act of sharing a fiction. Is there a common ground between the real that can be touched through a story and the real that is isolated and cracks up in an invisible cage?

柴田 美智子
SHIBATA Michiko

1955年 東京都生まれ。東京都拠点。
Born in Tokyo in 1955 /Based in Tokyo.

1980	美学校 絵画教場にて菊畑茂久馬に師事する（〜1982）
1994	主に個展、グループ展で作品の発表を行う（〜現在）

主な展覧会

1994	「個展」廃墟に似た場所/好文画廊/東京都
1997	「個展」縁をなぞる/Gallery FLESCA/東京都
1999	「個展」不能/Key Gallery/東京都
2003	「個展」デッサン集・道を歩く猿/Key Gallery/東京都
2009	「個展」この世の水/Span Art Gallery/東京都
2011	「個展」牛に触れる/新宿眼科画廊/東京都
2017	「個展」変容/SPC Gallery/東京都
2018	「個展」猿が家の中に居る/宇フォーラム美術館/東京都
2020	「個展」緊急避難/Gallery brocken/東京都
2021	「個展」祖霊/1010 Art Gallery/神奈川県
2003	カメ3展/ギャラリーパルコ/東京都
2006	今日の反戦展/原爆の図丸木美術館/埼玉県
2017	815展/好文画廊/東京都（〜2022）

〈作品制作協力〉

鉄のオブジェ作家 永井キオ氏、ボランティアスタッフの皆様

Artist's Comment

既成の概念でありながら、その定義は個々に託された部分を持つ「芸術」という継承を実際に制作することによって考える者にとって、審査員やＳＮＳの評に接し、他の作家達の作品を創り出す工程をかいま見ることが出来た今回のＡＡＩＣでの体験は、とても貴重な糧となりました。この糧を鞄に入れ猿に手を引かれて先へと進んでまいります。「リアルのゆくえ」というずっと手離さずに考えてゆくべきテーマを与えられた幸甚に感謝しつつ。

Title

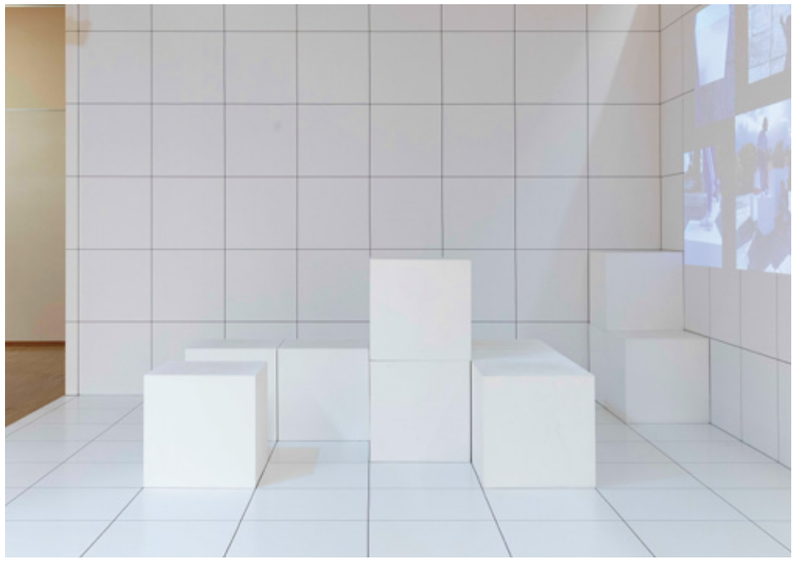
スクランブル交差空間 ―不干渉の調和―
Scramble Crossing Space -Harmony of Non-Interference-

Artist

身体企画ユニット ヨハク
YOHAKU

価値観の広がった現代で、おそらく全く違う世界を見ているであろう隣人と、ぶつからず、ふれあわず、しかし同じ空間で生きる。それも新たな調和の形。
キューブの中を６つの身体が動き、それぞれの１人称視点映像が投影される。
個人的な視野を通して捉えたリアルの断片は空間に積層し、不干渉の調和を描き出す。

In the modern era, where the sense of values has broadened, we live in the same space with neighbors who probably see a completely different world, without bumping into each other or touching each other. It's also a new form of harmony. Six bodies move inside a cube, and a first-person perspective of each of them is projected on the screen. Fragments of reality captured through personal vision are laminated in the space, depicting a harmony created by non-interference.



身体企画ユニット ヨハク
YOHAKU

秋山 きらら：1991年 東京都生まれ。加藤 航平：1990年 千葉県生まれ。東京都拠点。
AKIYAMA Kilarla : Born in Tokyo in 1991 / KATO Kohei : Born in Chiba Prefecture in 1990 / Based in Tokyo.

秋山 きらら

2015 | 立教大学現代心理学部映像身体学科 卒業
2021 | 無言に耳をすますパフォーマンスフェスティバル『ZIPPED』ディレクション /スパイラル

加藤 航平

2014 | 東京大学工学部システム創成学科 卒業
2020 | 週刊少年ジャンプ 第5回ストキンProにて準入選

主な受賞歴

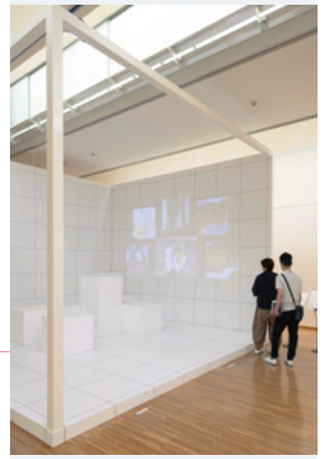
2021 | Legend Tokyo CHRONICLE 30秒クリエイター部門 最優秀クリエイター賞+優秀演出賞+CHET賞/東京
アートと遊びと子どもをつなぐメディアプログラム2021 汗かくメディア賞/愛知

〈パフォーマンス出演〉

視点1：秋山きらら
視点2：加藤航平
視点3：中村朱里
視点4：牧野彩季
視点5：遠藤七海
視点6：伊藤圭基、石本幸暉

〈作品制作協力〉

音楽：髙位妃楊子
設営協力：寺田鵬弘、谷崎壮太朗
テクニカルアドバイザー：潟中直斗



Artist's Comment

身体企画ユニット ヨハクは、パフォーマンスを軸に、舞台や映像表現、遊びやインスタレーションなどアウトプットの方法を模索しながら表現活動を行なっています。今回は、初めての長期間に及ぶ展示となり、またAAICとしても初めてのパフォーマンス系の表現だったと伺っています。人間の身体が展示空間に現れることの強さがある一方で、物質的な展示としてのみでも成り立つ強度を持たせることに苦心しました。会期後半では、SNSでの反響により様々な層の鑑賞者が訪れ、展示を楽しむ方法も非常に多様化していたことが印象深いです。ヨハクの手法を用いてキューブの制約を活かしつつ、テーマに応答するという挑戦をサポートいただいたすべての方に感謝致します。

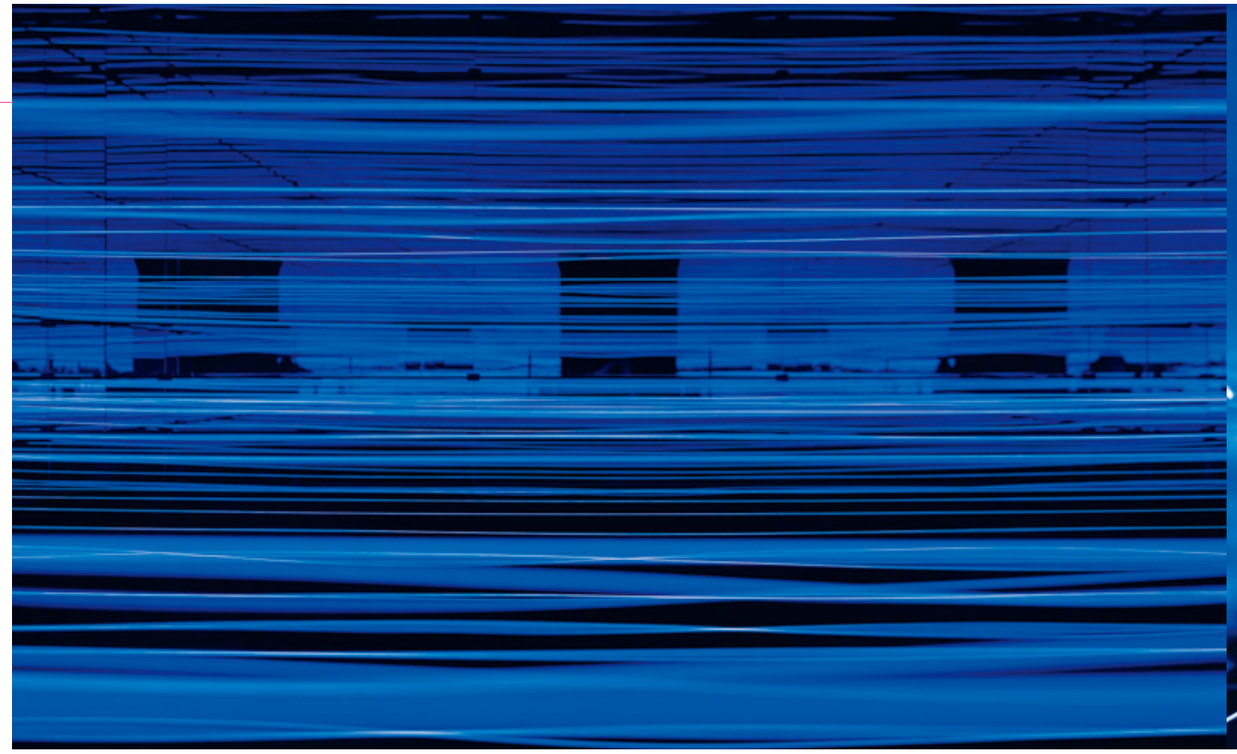
Title
Aftereal 6
Aftereal 6

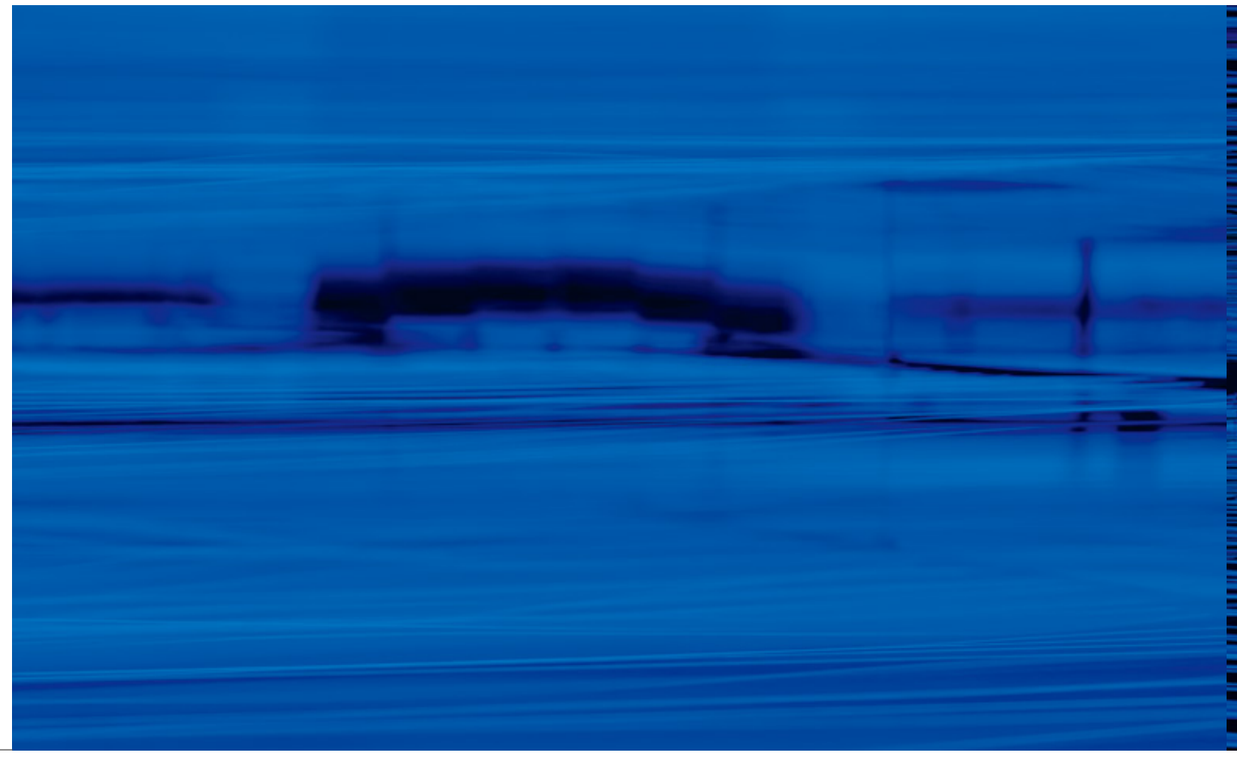
Artist
千田 泰広
CHIDA Yasuhiro

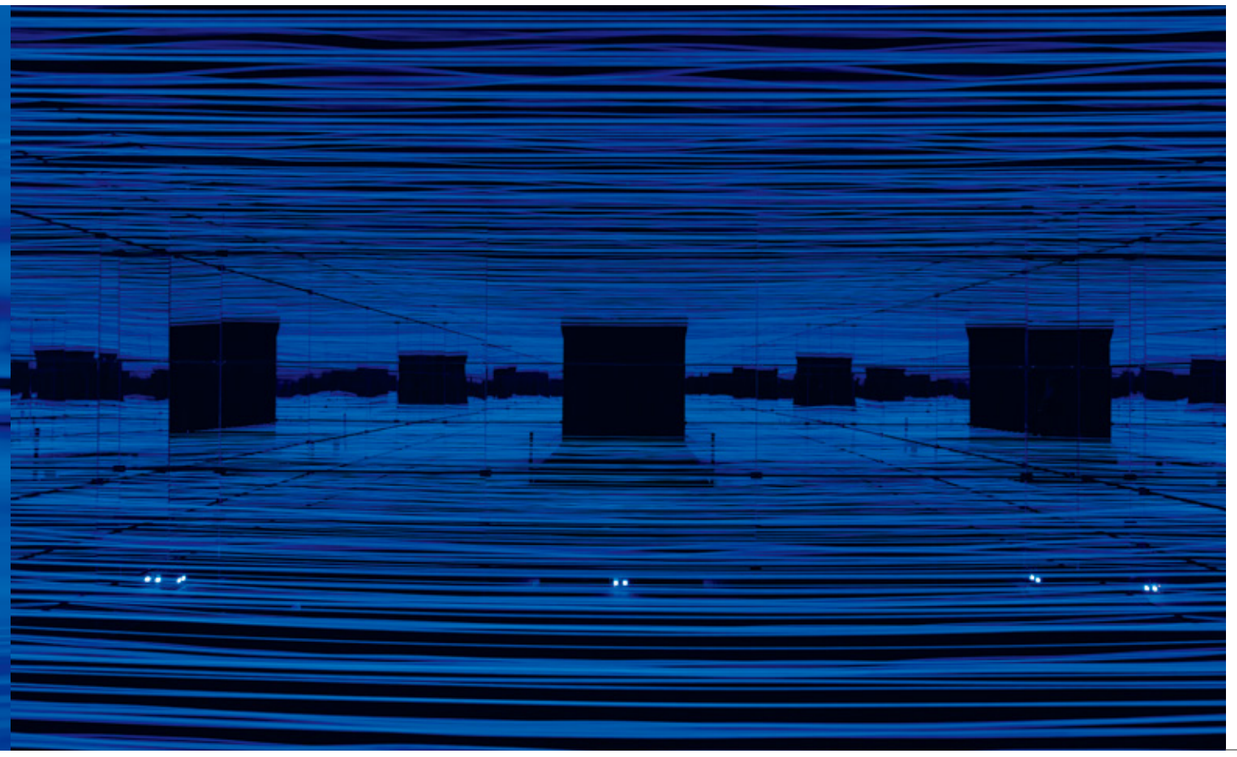
Photo by Tooru Tsuji

鑑賞者は作品内部に入り、高速で振動する蛍光糸で作られた空間を体験する。糸は紫外線で発光し、その光の残像のみが知覚される。眼と脳によって作り出された、実在しない体験をする。リアルのゆくえは、知覚不可能な存在に触れ、無目的な思考をするものに委ねられている。

Visitors can step inside this work to experience a space filled with rapidly vibrating fluorescent threads. As the threads glow in ultraviolet light, visitors can only perceive their afterimages. In this manner, they experience something that does not exist but is created by their eyes and brain. Where the real will go from there depends on whether or not they can touch the imperceptible and think without intentions.





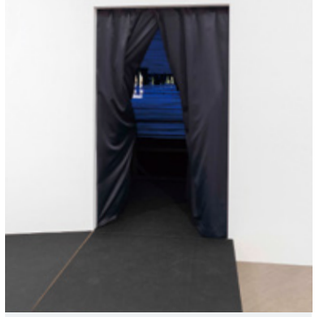


第1章　図版
Aftereal 6 ― 千田泰広

Photo by Tooru Tsuji

千田 泰広
CHIDA Yasuhiro

1977年 神奈川県生まれ。長野県拠点。
Born in Kanagawa Prefecture in 1977 / Based in Nagano Prefecture.



現 在 | 世界の8人の光のアーティスト(2022 Optica)
「空間の実体化」と「体性感覚の変容」をテーマに制作。欧州、北南米、アジアなどで活動
自作を常設する空間美術館を長野県辰野町に建設中

主な受賞歴

2018 | Life geek award/Emerging space prize/China/Shanghai
2019 | International Light Art Award　Audience prize/Germany/Unna

主な展覧会

2020 | Yuejin Lantern Festival/Tainan/Taiwan
Kunst Fest Spiele/Hannover/Germany
2021 | Wonderspaces/Austin,Scottsdale,Philadelphia/U.S.
Fête des Lumières/Lyon/France
2023 | Lux Helsinki/ Helsinki/Finland

〈作品制作協力〉

Technical support: Olaf Scharaa
Sound: Asako Miyaki
Special thanks: Hirohiko Koyamada, Kishin Himori

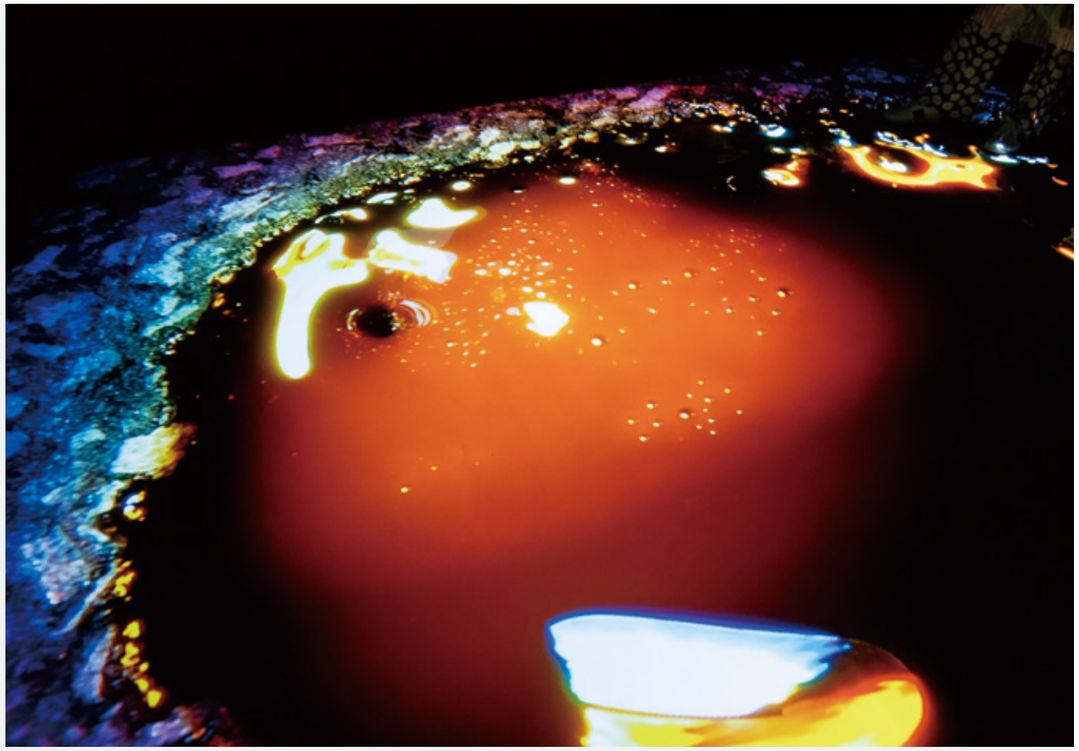
Artist's Comment

意味や物語は、人に向かって、言葉によって作られる。そこに制約はなく、意図的な操作が可能だ。形は技術によって作られ、物理世界と向き合う普遍的な能力が要求される。それを私は知性と呼びたい。それが何であるか(意味)と同様に、それがどうであるか(質)が大切だ。質が高ければ、詐欺的であれ、娯楽的であれ良いのだと思う、質とは精神の現れなのだから。質を見られる人間がいつまでもいてくれることを願いたい。宣長のこの言葉。姿は似せ難く、意は似せ易し。

大賞

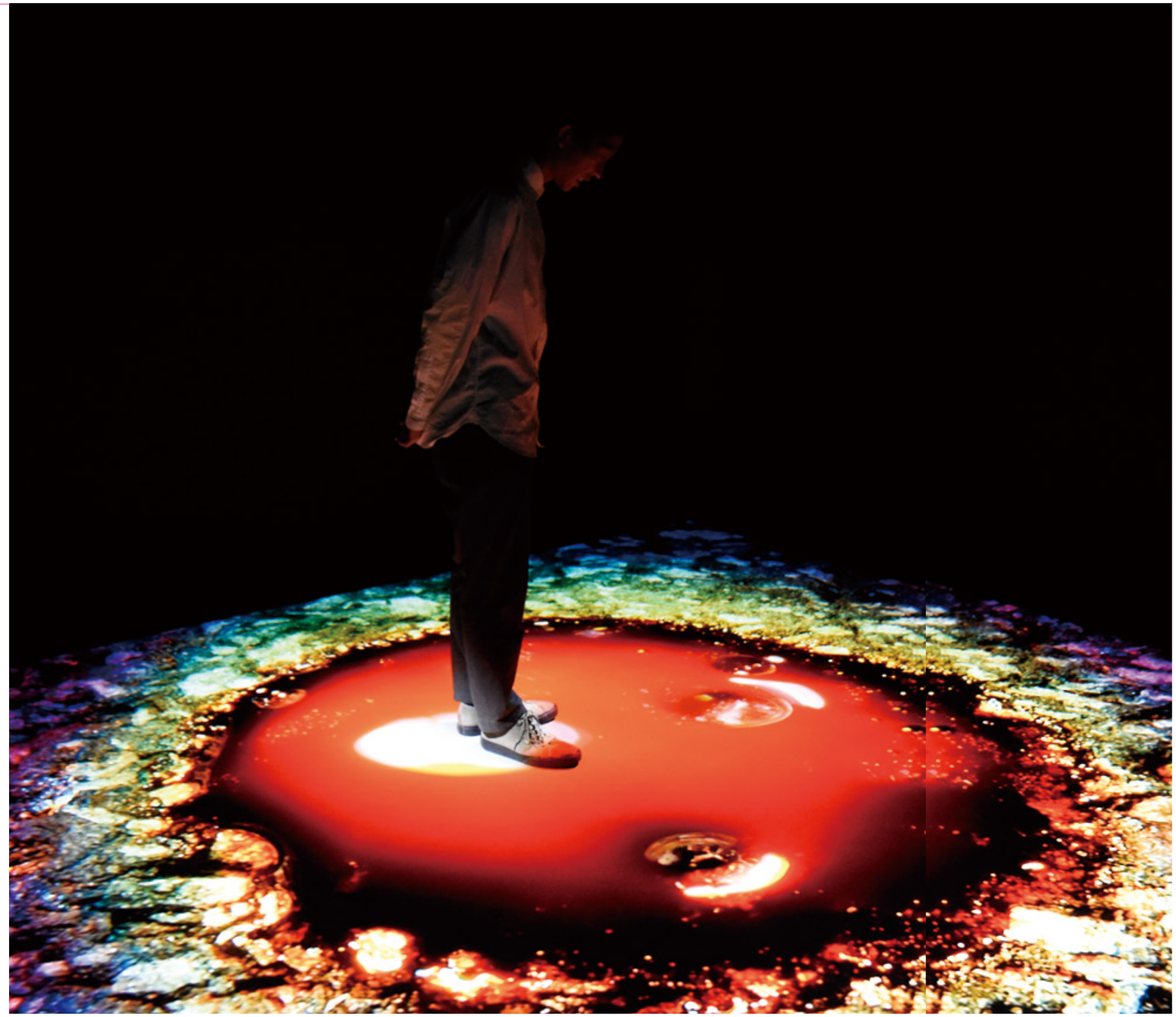
Title
Melting Hida Mountains
Melting Hida Mountains

Artist
千葉 麻十佳
CHIBA Madoka



宇宙空間にある太陽から発する光を使い、火山噴火という地球の活動で生まれた火山石を溶かす。石は溶けるとマグマになる。マグマの再現は石の時間を戻す行為であり、土地の歴史を遡る行為である。映像という虚構のマグマの上に立つことは、今いる場所、自然、地球、宇宙などについて思考を巡らす契機となる。

Light emitted from the sun in outer space melts rocks produced in volcanic eruptions, an activity of the earth. Rocks melt into magmas. Reproducing magmas is therefore an act of turning back the time of rocks, tracing the history of the land.
Standing on top of fictitious images of magmas, viewers are invited to contemplate where they are at this moment, Nature, the earth, the universe, and more.



第1章　図版
Melting Hida Mountains ― 千葉麻十佳

千葉 麻十佳
CHIBA Madoka

1982年 北海道生まれ。北海道拠点。
Born in Hokkaido in 1982 / Based in Hokkaido.

2009 ｜ 東京藝術大学大学院彫刻専攻 修了

主な受賞歴

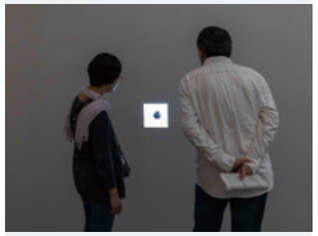
2011 ｜ 前橋アートコンペライブ銅賞/群馬県
2012 ｜ 前橋アートコンペライブ審査員賞/群馬県

主な展覧会

2015 ｜ 中之条ビエンナーレ2015/中之条町/群馬県　英名：Nakanojo Biennale 2015
2017 ｜ 1000 Grad/Hohhaus Museum「個展」/ドイツ　英名：1000 Degrees
2018 ｜ ウェザーリポート 風景からアースワーク、そしてネオ・コスモグラフィア/栃木県立美術館/栃木県
英名：Weather Report From Landscape via Earthworks to Neo-Cosmographia
2019 ｜ 光が射す/ギャラリーオフグリッド「個展」/福島県　英名：Lightrays
2022 ｜ TOKACHIDAKE「個展」/富良野市博物館/北海道　英名は日本語タイトルに同じ
水郡線奥久慈アートフィールド/大子町/茨城県　英名：SUIGUN LINE OKUKUJI ART FIELD

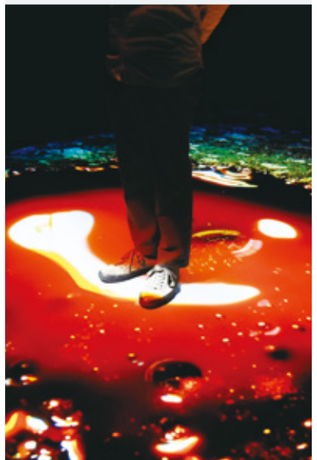
〈作品制作協力〉

展示技術/映像音響技術/機材協力：宮路雅行
映像撮影：小林大賀
設営補助：宇留野圭、玉田大和
外壁画等：ボランティアの皆さま
制作協力：さっぽろ天神山アートスタジオ



Artist's Comment

2022年11月に作品の石を拾うため岐阜県を旅しました。そのとき初めて、スーパーカミオカンデがあり、長良川が太平洋と日本海の分水嶺に横たわっていて、栗きんとんがこんなにもおいしかったことを知りました。それまで私の中の岐阜県はぼんやりとした空間でしたが、この経験により、私にとってここが具体性を伴う場所に変わりました。今作では、宇宙における地球という星を、石の時間を戻すことで空間から場所へ変化させようと試みました。地球のどこにいても足のずっと下はひとつの点でつながっています。今作が岐阜だけに留まらず、地球や宇宙まで思考を広げるきっかけとなってくれたらうれしいです。



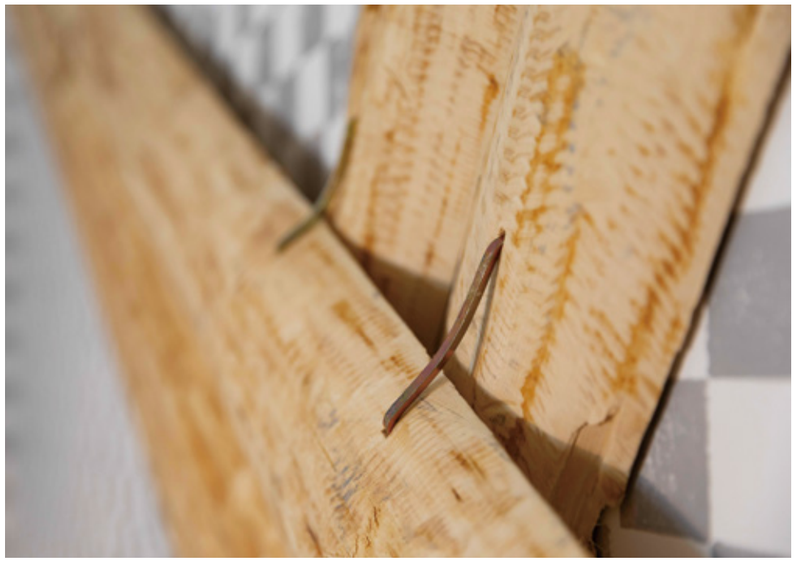
岩崎秀雄 賞

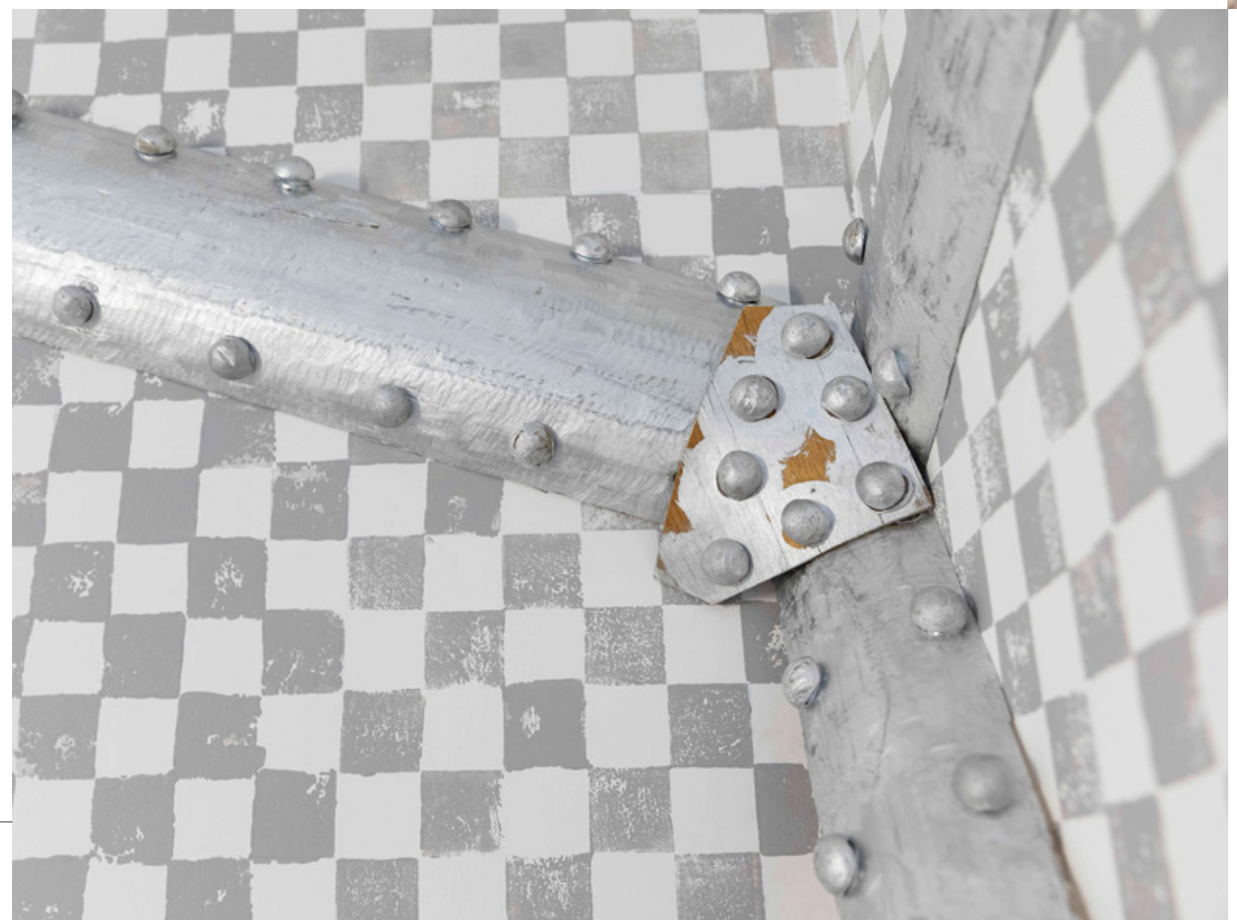
Title
橋の形
Shapes of bridges

Artist
古屋 崇久
FURUYA Takahisa

岐阜県は、言わずと知れた大きな一級河川が何本も流れている土地であり、橋の数も計り知れない。その為この土地では、橋に対する恩恵をより大きく受けているのかもしれない。美術館周辺・岐阜県内を中心に河川等で橋の形をリサーチ。橋の概念、形に関して考察しキューブに落とし込む。

It is well known that there are several large (Class I) rivers in Gifu Prefecture, with numerous bridges over them. It can thus be said that Gifu benefits enormously from bridges.
This work is a condensation into the Cube of research into the shapes of the bridges located around the museum and within Gifu Prefecture and observations regarding the concepts and shapes of bridges.





MD アルミン
JIS-K-5492

古屋 崇久
FURUYA Takahisa

1991年 山梨県生まれ。埼玉県拠点。
Born in Yamanashi Prefecture in 1991 / Based in Saitama Prefecture.

主な受賞歴

2016 | 「六甲ミーツ・アート芸術散歩2016」グランプリ/兵庫県
2019 | 「Tokyo Midtown Award 2019」優秀賞・オーディエンス賞/東京都

主な展覧会

2013 | 小菅村プロジェクト/小菅村内/山梨県（〜2016）
2014 | 木津川アート2014/西谷邸跡地/京都府
2015 | ますとみやまART2015/旧増富中学校/山梨県
中之条ビエンナーレ/中之条町内/群馬県
2016 | 六甲ミーツ・アート芸術散歩/六甲山/兵庫県
2017 | 両面片隅一道風景/53美術館/中国/広東省
中之条ビエンナーレ/中之条町内/群馬県
六甲ミーツ・アート芸術散歩/六甲山/兵庫県
第20回我孫子国際野外美術展/国道356土手/千葉県
アーツさいたま・きたまちフェスタ/プラザノース/埼玉県
2018 | アートアイランズTOKYO 2018/旧波浮小学校/東京都
Art Viewing OME/青梅市立美術館/東京都
2019 | 個展・ストレスの形/Over The Border/東京都
Tokyo Midtown Award 2019/Tokyo Midtown Roppongi/東京都
Art Viewing OME/青梅市立美術館/東京都
2020 | アーツさいたま・きたまちフェスタ/プラザノース/埼玉県
2021 | Art Viewing OME/青梅市立美術館/東京都
2022 | 六本木アートナイト2022/Tokyo Midtown Roppongi/東京都

〈作品制作協力〉

川尻哲也、倉持太一、コミヤマレンマ

Artist's Comment

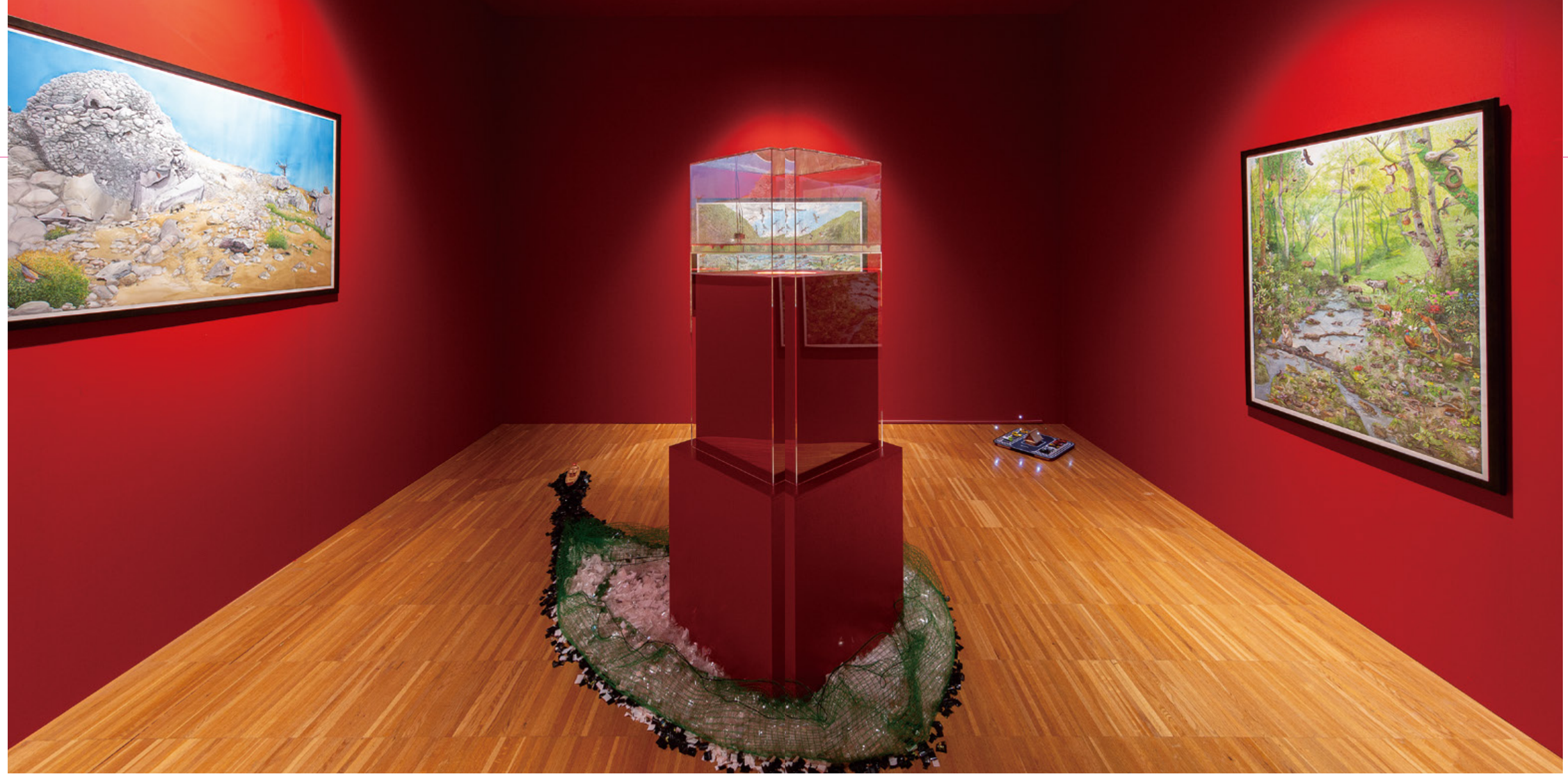
今回、キューブの内側をデザインソフトで用いられる透明化を意味する市松模様で覆い、その中に岐阜県各所で抽出した橋の元となる形を配置した。現地で見る事、聞く事、話す事、匂う事、触る事、資料・小説を読み漁り追体験する事、夢で見る事。全てが何かと何かを繋いでいる橋のような存在であった。河川に架かる橋と違うのは、常に漂っている事。河川に架かる橋を元にそんな形を表現することにした。それは、何処とも繋がっていない橋の形。気が付けば、2022年12月から2023年6月の半年間も岐阜県に毎月通っていた。取材・サポートをしてくれた方々に感謝申し上げます。

Title
アンブレラ種
Umbrella species

Artist
florian gadenne + miki okubo
フロリアン・ガデン+ミキ・オオクボ

生物学で生態系ピラミッドの頂点に立つ敵無しの捕食者を意味する「アンブレラ種」。その適切な保護はその〈傘〉に含まれる生態系全体の保全によってこそ実現する。山・川・森から成る三連水彩画には、イヌワシを頂点とする、岐阜県の豊かな自然の複雑な生物間ネットワークが精緻に描かれている。インスタレーションを通じて、切迫した生態系危機を生きる新しいエコロジー思想を模索する。

In biology, the term “umbrella species” denotes an enemy-free predator at the top of an ecological pyramid. An umbrella species can be properly protected only by conserving the entire ecosystem that comes under the umbrella. The triptych watercolor paintings of mountains, rivers, and forests are a minute depiction of the complex interspecies networks existing in the rich natural environment of Gifu Prefecture, with golden eagles at the top. The installation invites viewers to explore new ecological ideas for living amid the urgent ecological crisis.



florian gadenne + miki okubo

フロリアン・ガデン+ミキ・オオクボ

florian gadenne：1987年 パリ生まれ。miki okubo：1984年 札幌生まれ。北海道・岐阜県拠点。
GADENNE Florian : Born in Paris in 1987 / OKUBO Miki : Born in Sapporo in 1984 / Based in Hokkaido and Gifu Prefectures.

florian gadenne

2006 | JB Corot高等学校卒業、バカロレア取得、ディプロマDiplôme National Supérieure d'Expression plastique（DNSEP）取得
2011 | ナント・サン＝ナゼール高等美術学校（École supérieure des beaux-arts de Nantes Saint-Nazaire）卒業（学士号）
2013 | ナント・サン＝ナゼール高等美術学校（École supérieure des beaux-arts de Nantes Saint-Nazaire）修了（修士号）

miki okubo

2010 | 京都大学人間・環境学研究科 修了（人間・環境学修士）
　　 | パリ第８大学造形芸術・現代アート科 修了（芸術修士）
2013 | パリ国立高等装飾美術学校研究員プログラム 修了（2010〜2013）
2015 | パリ第８大学大学院 美学芸術の科学とテクノロジー 修了（芸術博士）
2023 | 情報科学芸術大学院大学（准教授、現職）

主な受賞歴（florian gadenne）

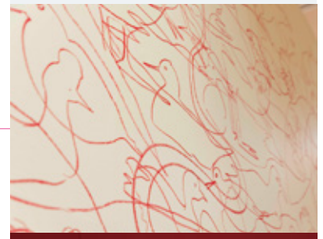
2017 | 現代アートフェスティバル＜Paris Artistes＞入選/フランス
2022 | 第10回500m美術館賞 グランプリ賞/北海道
2023 | FACE 2023 (Frontier Artists Contest Exhibition) 入選/東京

主な展覧会

2017 | フロリアン・ガデン個展「monades」/La Menuiserie de Therdonne/フランス
　　 | グループ展「ファルマコン：医療とエコロジーのアプローチによる芸術的感化」/The Terminal KYOTO/京都府
2018 | デュオ展「Orbite elliptique：松田有加里×フロリアン・ガデン」/ギャラリーサラ/滋賀県
2020 | グループ展「ファルマコン：連鎖/反応」/アトリエみつしま/京都府
2021 | グループ展「ファルマコン：死生への捧げもの」/アトリエみつしま/京都府
2022 | グループ展「ファルマコン：新生への捧げもの」/TheTerminal KYOTO/京都府

〈作品制作協力〉

助成：公益財団法人 野村財団
協力：岐阜大学応用生物科学部附属野生動物管理学研究センター、art-sensibilisation



Artist's Comment

岐阜に移住した私たちの最初の作品が岐阜県の豊かな自然に着目した「アンブレラ種」となったことは記念碑的であり、多くの県民の皆様に鑑賞いただけたことを心より光栄に思います。研究と制作に五ヶ月を要した「山」「川」「森」の三連画が描く美しい〈生〉の有様はCUBE外壁を超えて鑑賞者一人ひとりの心に滲み入り、私たちが自らを取り巻く環境と築く関係性について丁寧に思考し配慮するよう促し続けてくれることを願います。

Title

One room

One room

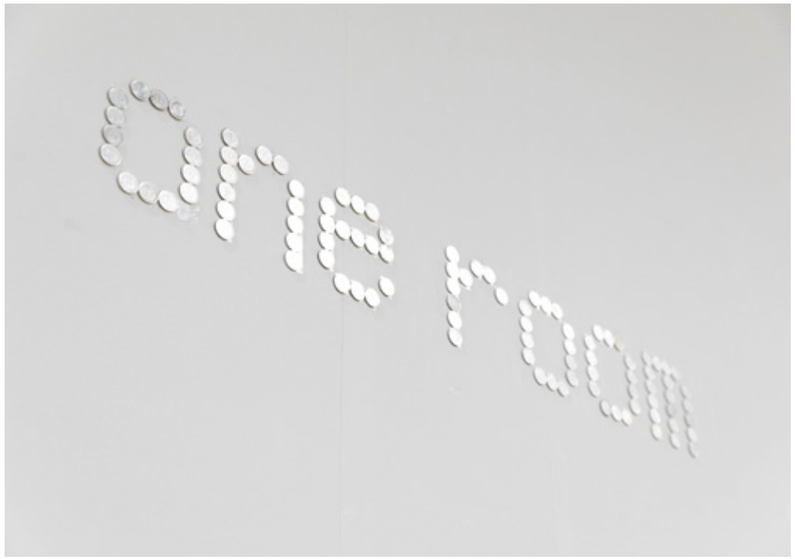
Artist

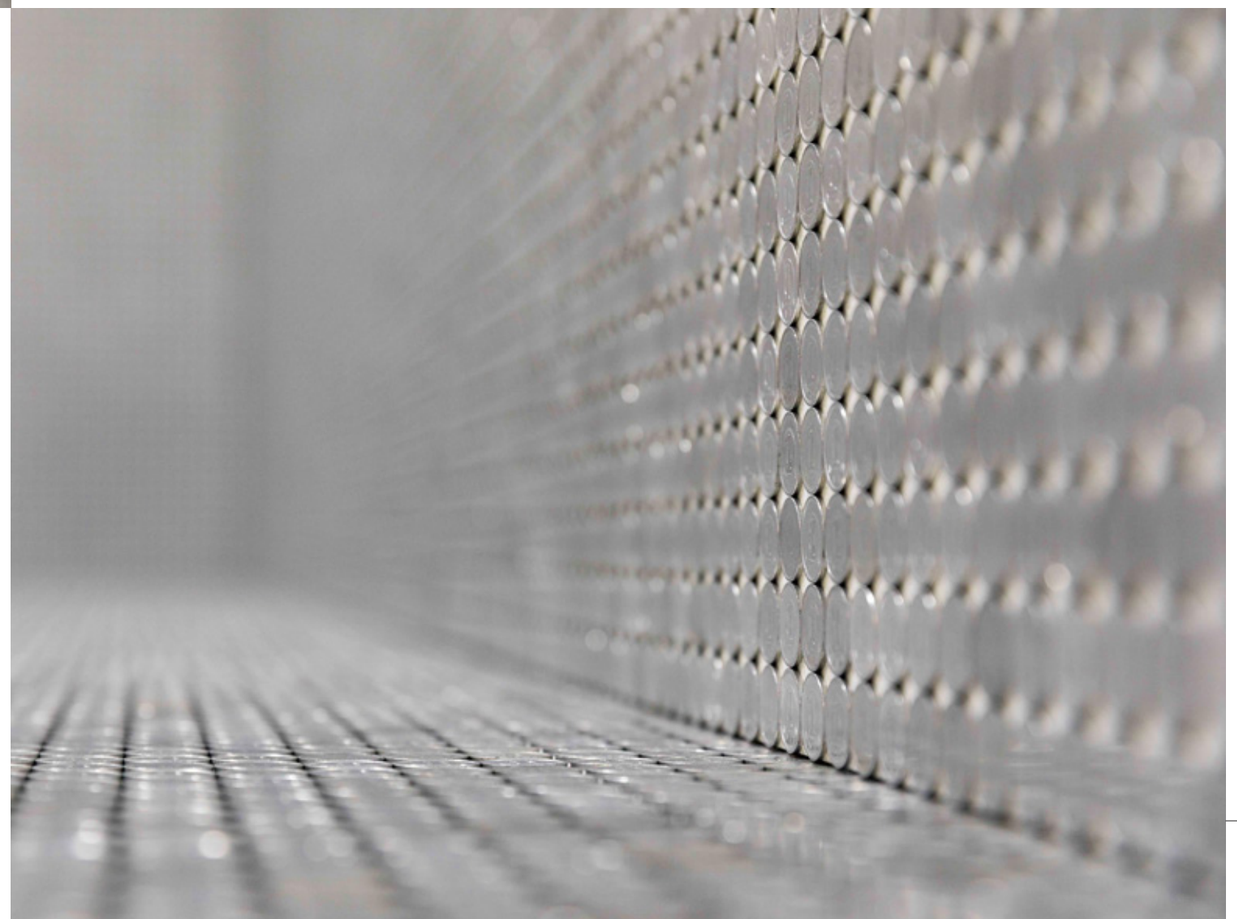
山本 雄教

YAMAMOTO Yukyo

床面に至るまでキューブ全体に敷き詰められた一円硬貨は、貨幣というルールから離れ、物質的な存在感が露わになる。そこから見えてくるのは硬貨の「もの」としての魅力か、あるいは離れることで再認識される貨幣のルールか。
またキューブ内に入る時、硬貨を踏むかどうか考えるその一瞬には、それぞれの考え方や価値観が現れるだろう。そしてそんな人々の姿を、硬貨は反射し映し出す。

Covering the entire interior of the Cube, including the floor, one-yen coins depart from the rule of currency and reveal their materiality. Is what emerges their beauty as "things" or the rule of currency, of which one can become conscious anew as the coins depart from it? To go further inside the Cube, visitors must step on the coins on the floor. In that brief moment they wonder whether or not to do so, and their respective ways of thinking and values will manifest themselves, as the coins silently reflect their silhouettes.


One room



山本 雄教

YAMAMOTO Yukyo

1988年 京都府生まれ。京都府拠点。
Born in Kyoto Prefecture in 1988 /Based in Kyoto Prefecture.

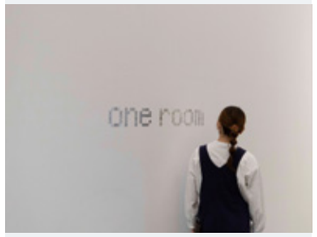
2010 | 成安造形大学造形美術科日本画クラス 卒業
2013 | 京都造形芸術大学大学院修士課程ペインティング領域 修了

主な受賞歴

2020 | 京都 日本画新展2020/奨励賞・京都市長賞/美術館「えき」KYOTO/京都府
2021 | 第8回トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展/準大賞/愛知県

主な展覧会

2018 | 「個展」青いテントと五つの輪/YOD gallery/大阪府
2019 | 「個展」faint noise/+1art/大阪府
2021 | 「個展」豊穣の空洞/河岸ホテル/京都府
「個展」Mosaic life/高島屋大阪店・新宿店・米子店・日本橋店/大阪府・東京都・鳥取県
第8回東山魁夷記念 日経日本画大賞展/上野の森美術館/東京都
2022 | 「個展」How much?/Artglorieux GALLERY OF OSAKA/大阪府
「個展」〇〇〇〇円の芸術家/至峰堂画廊/東京都・大阪府
たえて日本画のなかりせば：東京都美術館篇/東京都美術館/東京都
市制90周年記念　わたしたちの絵　時代の自画像/平塚市美術館/神奈川県

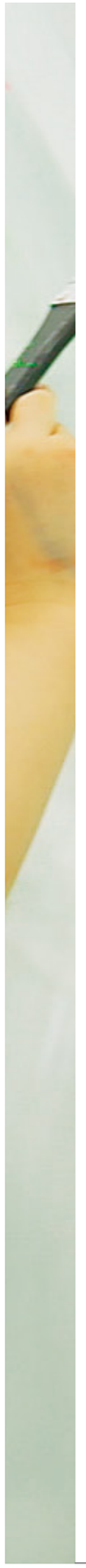


Artist's Comment

会期中は作品全体で何枚の1円玉が使われているのかという質問が多かったそうなのですが、せっかくなので(?)One roomにかかったお金をざっと計算してみました。1円硬貨：202,030円、両替費：121,200円、パネル代：557,700円、その他制作費：229,008円、搬入時の交通・宿泊費：37,810円、輸送費：140,000円　合計：1,287,748円。…これもひとつのリアルのゆくえ！

Chapter
2
Document

第2章
記 録



募集から審査までの記録

募集規定

1. **募集期間**
2021年12月24日(金)～2022年5月16日(月)

2. **テーマ:「リアル」のゆくえ**
世界中で猛威を振るう新型コロナウイルスの感染症は、私たちの社会と日常生活を一変させました。急速に進化するデジタル技術は私たちの生活の奥深くにまで入り込み、オンライン空間の中で人と会い、話し、仕事を続け、あるいは芸術や娯楽に親しむことも日常となり、これまで自明とされてきた私たちの「現実」はその意味を大きく変えようとしています。
そのような人類史の転換期とも言える今、私たちにとって「リアル」とは一体何を意味しているのか、それはこれからどこへ向かうのか、地球環境とメディア環境、真実と虚構、あるいは私たち自身の生と死など様々な「現実」を前に芸術という人類の営みを改めて問い直してみたいと思います。
3回目となる「Art Award IN THE CUBE 2023」では、丈六(*1)サイズのキューブ内に表現された、あなたにとっての【「リアル」とそのゆくえ】に出会えることを期待しています。

*1:丈六
ブッダの身長が1 丈6 尺であったといわれることから丈六仏が作られるようになりました。本展では第1 回のテーマ「身体のゆくえ」に触発され、キューブの寸法を丈六と定めました。

3. **応募資格**
Art Award IN THE CUBE 2023の趣旨を理解し、入選された場合には作品の完成まで責任を持って取組める方(個人、グループ、年齢、国籍を問いません)

4. **作品規定等**
作品は、未発表のものに限ります。1名・1グループにつき1作品までとします。

5. **作品寸法等**
4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)のキューブ空間で展示できること

6. **審査料**
1点につき5,000円(税込)

7. **賞・賞金**
大賞 賞金 500万円 ／1点
審査員賞 賞金 100万円
入選 賞金 50万円／14作品程度(作品制作時に支給)

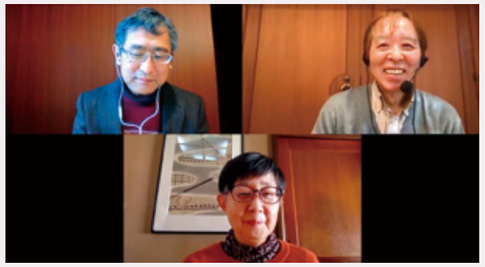
公募説明会

審査員とAAIC2017、AAIC2020の入選作家をゲストに全国6か所でのトークイベント/公募説明会の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、名古屋、東京、福岡、京都はオンライン開催、金沢、岐阜がリアル開催となった。2021年12月からの公募開始をPRし、機運を盛り上げた。また、作品制作への想いやAAICの取り組み等について、入選作家からの生の声が聞ける貴重な機会となった。

公募説明オンライントーク ※各会場で実施予定であったが、新型コロナ感染症拡大防止のため中止とし、オンライン開催となった。収録後、後日、公式サイトにて公開。

2022年1月22日(土)　AAIC2023「オンライントーク」
※(当初予定)名古屋:港まちポットラックビル

寺内曜子さん(AAIC2023審査員)、安野太郎さん(AAIC2017入賞作家／高橋源一郎賞)の応募者へのメッセージを収録。寺内曜子さんとAAIC企画委員の安藤泰彦さん・河西栄二さんによる対談を実施。



2022年1月30日(日)　AAIC2023「オンライントーク」
※(当初予定)東京:3331ArtsChiyoda

入江経一さん・北村明子さん(AAIC2023審査員)、大貫仁美さん(AAIC2020入選作家)の応募者へのメッセージを収録。入江経一さん・北村明子さんとAAIC企画委員の日比野克彦さん・三輪眞弘さんによる対談を実施。

2022年2月12日(土)　AAIC2023「オンライントーク」
※(当初予定)福岡:福岡アジア美術館

四方幸子さん(AAIC2023審査員)、北川純さん(AAIC2020入賞作家／藤森照信賞)の応募者へのメッセージを収録。四方幸子さんと、AAIC企画委員の河西栄二さん・衣笠文彦さんによる対談を実施。

2022年2月20日(土)　AAIC2023「オンライントーク」
※(当初予定)京都:FabCafeKyoto

山極壽一さん(AAIC2023審査員)、橋本哲史さん(AAIC2020入選作家)の応募者へのメッセージを収録。山極壽一さんと、AAIC企画委員の桑原鑌司さん・衣笠文彦さんによる対談を実施。

公募説明トークイベント「CROSS TALK」

in 金沢

日　時：2022年3月12日（土）　AAIC2023「CROSS TALK in 金沢」
会　場：金沢アートグミ（金沢市）　参加者：約30名

第1部　寺内曜子（AAIC2023審査員）、青木正弘・佐藤昌宏（AAIC企画委員）
第2部　山本麻璃絵＋姫野亜也（AAIC2020大賞作家）、青木正弘・佐藤昌宏（AAIC企画委員）

寺内曜子さんからはご自身の作品を画像で紹介しつつ作品制作に対する姿勢やAAICを審査する想いを、山本麻璃絵さん・姫野亜也さんからは、お二人の作品を紹介いただきながら、AAIC2020での応募の想いやその経験による様々なお話をいただいた。

in 岐阜

日　時：2022年3月19日（土）　AAIC2023「CROSS TALK in 岐阜」
会　場：岐阜県美術館　参加者：約50名

第1部　四方幸子（AAIC2023審査員）、桑原鑛司・安藤泰彦・三輪眞弘（AAIC企画委員）
第2部　笠原巧（AAIC2020入選作家）、桑原鑛司・安藤泰彦・三輪眞弘（AAIC企画委員）

四方幸子さんからは、キュレーターとしての考え方、アートの重要性などの想いを、桑原委員長からはAAICの特徴や魅力を紹介いただいた。笠原巧さんからは、応募のきっかけや初めてのアート作品制作への想い、制作支援などのAAICの魅力についてお話いただいた。

応募状況

海外を含む各地から574件の応募。10代から80代までの幅広い年齢層からの応募の中、30代から40代が全体の約57%を占めた。国内居住地においては東京が最も多く26.5%、次いで愛知県の9.9%。海外からの応募は全体の5.4%を占めた。

年代

19歳以下	0.7%
20〜29歳	20.4%
30〜39歳	32.2%
40〜49歳	24.7%
50〜59歳	11.7%
60〜69歳	7.8%
70歳以上	2.3%
不明	0.2%

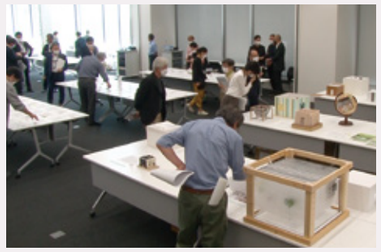
地域

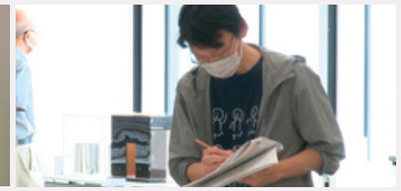
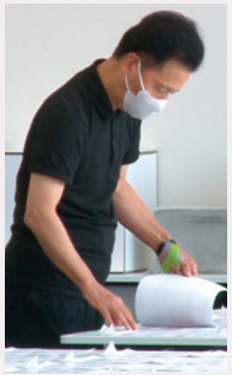
1. 東京都	26.5%
2. 愛知県	9.9%
3. 京都府	7.8%
4. 神奈川県	7.5%
5. 大阪府	6.1%
その他（国内）	36.8%
その他（海外）	5.4%

一次審査

日　時：2022年9月25日（日）
会　場：JRゲートタワー カンファレンス（名古屋市）

様々な分野で活躍される審査員が審査会場に集結（1名はオンライン参加）。会場には応募作品574点全ての企画書が並べられ、必要に応じて任意提出資料の映像・音声・マケットも確認できる会場にて審査が行われた。一次審査では、応募者が特定できる情報（作家名・略歴等）を伏せて実施。審査の結果、14組の入選作品を選定した。

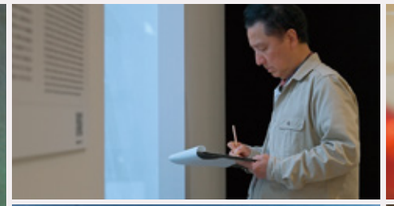


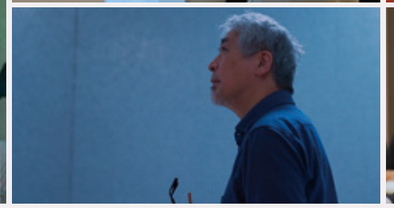



二次審査

日　時：2023年4月9日（日）
会　場：岐阜県美術館

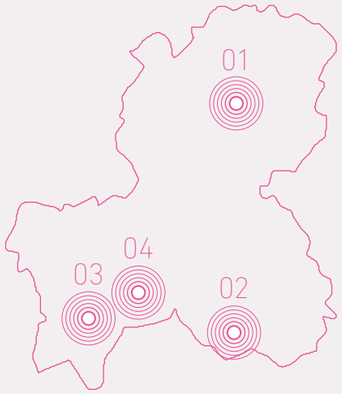
7名の審査員が一堂に会し、岐阜県美術館に展示された14作品を1日かけて鑑賞、討議した。優れた作品が多く、大賞選考にあたっては白熱した議論が終始繰り広げられたが、最終的には審査員全員が納得する形で大賞が選出される結果となった。





関連プログラム［プレイベント］

会期前の展覧会PRの一環として、岐阜県内各所でAAIC2020・2023入選作家によるワークショップを実施するとともに、AAIC2023審査員・山極壽一さんによる講演会を実施。



01

AAIC2020大賞作家によるワークショップ
石から見いだす自分だけのカタチ
山本麻璃絵＋姫野亜也

日　時：2022年11月27日（日）13:30〜15:00
会　場：飛騨高山まちの博物館（高山市）
参加者：大理石コース10名、キラ石コース10名（事前申込制）

大理石を割って磨いてカタチを見出す作家の道具を使って彫刻を体験する「大理石コース」と、キラキラな石の価値を見出して、その石のための場を作る、水晶石と木材を使ったオブジェを作る「キラ石コース」。子どもも大人も彫刻の世界を楽しんだ。

参加者コメント

「普段なかなか経験できない楽しいワークショップだった。何気ないものが作品になることを学べた。」
「日常で大理石を加工することができないため、自身で加工したりすることができ楽しかった。」

02

AAIC2023入選作家によるワークショップ
空気と光で体感！巨大気球を浮かせてみよう。
奥中章人

日　時：2023年1月15日（日）13:30〜15:30
会　場：セラミックパークMINO（多治見市）
参加者：37名（事前申込制）

身の回りにある空気をモチーフにした目には見えない造形あそび。半透明のポリ袋で空気を捕まえたり、捕まえて袋を縛ったら叩いて音を聞いてみたり、ボールのように飛ばすとゆっくり落ちてきたり。最後には、みんなで力を合わせて巨大な気球に温かい空気を入れて浮かばせた。

参加者コメント

「にこやかで優しい先生で、空気の恩恵について、空気抵抗や空気の振動について大変分かりやすく教えてくださった。」
「科学も知れて身体で楽しめて、子どもも久しぶりに心から楽しかったと言ってキラキラしてました！」

03

AAIC2023入選作家によるワークショップ
おもしろいうごきと景色を組み合わせ、ショートムービーをつくろう
「カメラでうごき採集！」
身体企画ユニット ヨハク

日　時：2023年2月5日（日）13:00〜16:00
会　場：大垣市スイトピアセンター（大垣市）
参加者：12名（事前申込制）

カメラを通してまわりを見たとき、普段の風景やうごきでも少し違って見えるはず。実際に撮ってみて、見え方を確認しながら、自分だけのうごきを採集。みんなで試行錯誤しながら、スマホなど手軽な機材を使って、個々の映像作品をつくりあげた。

参加者コメント

「おもしろかった。あんな風に動画をとって、編集したのが初めてで楽しかったです!!」
「子どもの思いつきを先生に見事に作品にしていただけてすごいと思いましたしうれしかったです。」

04

AAIC2023審査員
山極壽一 講演会「アートは人類に何をもたらしたか」

日　時：2023年3月5日（日）13:00〜14:00
会　場：岐阜県美術館 講堂
来場者：126名（事前申込制）

人類学・霊長類学の専門家であり総合地球環境学研究所所長の山極壽一さん（AAIC2023審査員）により、人類の起源・進化から今日に至るまでの切り口でのアート論を講演いただいた。岐阜県内に留まらず愛知県・三重県から、幅広い年齢層の方々に来場いただいた。

参加者コメント

「人間の社会性と芸術を通じての発達、なるほどと思いながら視点をメタバースの危うさまで広げていただいたのが楽しかったです。」
「人類の進化と芸術の関りを知る事が出来て良かったです。」
「これからの社会について若者たちに考えてほしい。せひ多くの人に聞いてほしい内容でした。」
「過去・現在・未来へと時間とアートとの関連が良く分かった。」

AAICの特徴

Art Award IN THE CUBE（以下、AAIC）は、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的とした企画公募展。一次審査を通過した企画は、アイデアや試作の段階からは一歩踏み込んだ作品制作と完成度の高さが問われる。
AAICでは、キューブのスケール感や構造、美術館での展示や法令に伴う制約等、プランの実現化における様々な面を支援。また、各作家への作品制作支援に留まらず、芸術祭そのものの開催における企業・団体からの協賛を積極的に募っている。

Art Award IN THE CUBE
3年に1度の展覧会

・ジャンルを問わない企画公募展
・開催ごとで決まるテーマ
・キューブ空間でのアート作品

▲ 作家支援　▲ 制作アドバイザー　▲ AAICサポーターズ　▲ 企業・団体協賛

作家支援

一次審査で選定された14組の作家は、企画書で訴求したアイデアや試作を深掘りし、テーマ“「リアル」のゆくえ”を表した作品制作を行う。4.8×4.8×3.6mのキューブ空間という条件の中でのアイデアの実現化、構造や展示するうえでの制約等、制作アドバイザーを中心に様々な面から作家の作品制作を支援した。

1. 入選者には賞金（50万円）を授与
2. 制作アドバイザー（衣笠文彦AAIC企画委員）による制作支援及び会期中のメンテナンス支援
3. 作品制作・展示に関わる技術的な相談事への支援
4. 出品者の作品制作・展示に関わる外部協力者（岐阜県内企業・団体など）の紹介等
5. 岐阜県美術館での作品設置に関わるAAICサポーターズ（ボランティア）の制作補助

AAICサポーターズ（ボランティア）活動

作品制作や会場運営などをサポートするサポーターズ（ボランティア）を募集し、県内外から計67名（延べ444回）の方に参加いただいた。作品制作補助、各作品の案内や看視補助、ワークショップの運営補助、作品撤収作業補助など、連日活動を行った。

サポーターズの声

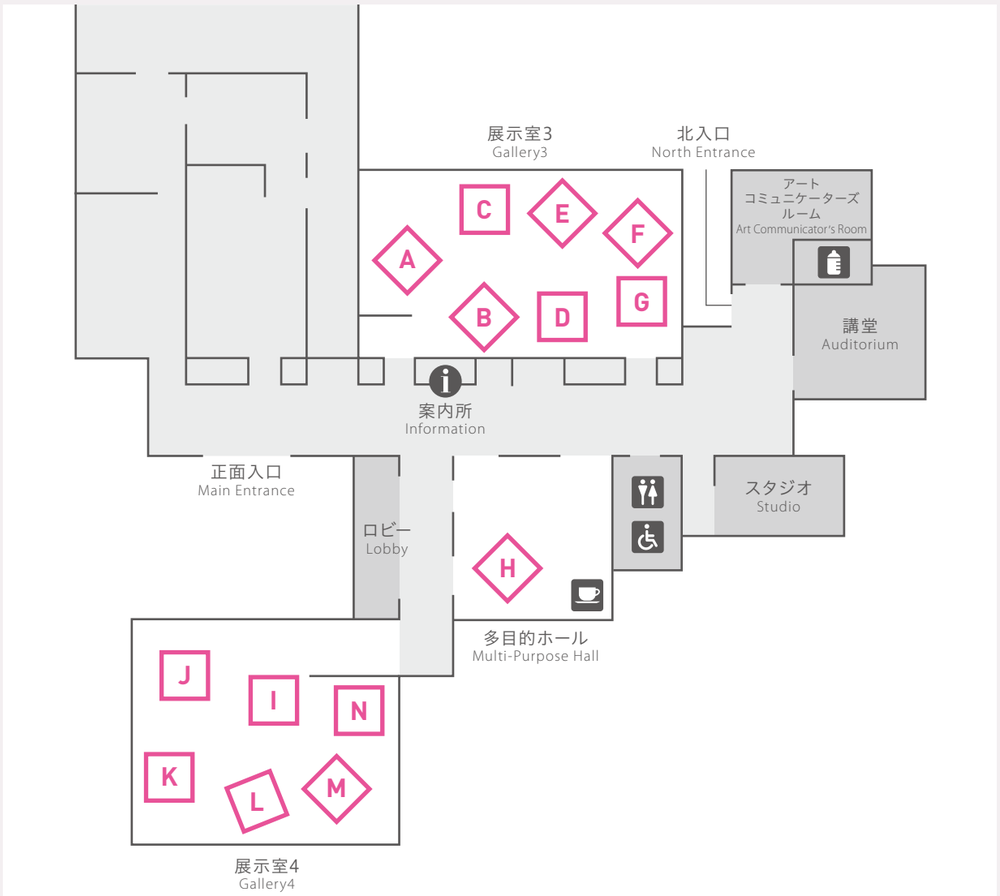
「制作の裏側を見れたり作家の方とお話ししたり、普段なかなかできない経験ができた。」
「今までにない体験だった。作家さんたちと話せてとても楽しかった。」
「来場者やサポーターズと作品について感想や見どころを共有できたことが楽しかった。」

企業・団体による協賛・助成

AAICは地元企業・団体の協賛を得て開催しており、AAIC2023では、前回を大きく上回る15もの企業・団体のご協賛と1件の助成を得て開催した。

展覧会概要

会　　期：2023年4月22日（土）–6月18日（日）（開館日：50日間）
会　　場：岐阜県美術館
来場者数：61,763名



A　千田泰広《Aftereal 6》
CHIDA Yasuhiro《Aftereal 6》

B　千葉麻十佳《Melting Hida Mountains》
CHIBA Madoka《Melting Hida Mountains》

C　岡ともみ《サカサゴト》
OKA Tomomi《Sakasagoto -Inverted Ordinary Life-》

D　INAGAKI MOMO《JK in the street.（普通の女子高生）》
イナガキ モモ《JK in the street.(tadano joshikosei)》

E　山本雄教《One room》
YAMAMOTO Yukyo《One room》

F　柴田美智子《触れるもの、絶対に触れないもの》
SHIBATA Michiko《Things that can be touched, things that can never be touched》

G　GengoRaw（石橋友也＋新倉健人）《バベルのランドスケープ》
GengoRaw (ISHIBASHI Tomoya+NIIKURA Kento)《Landscapes of Babel》

H　奥中章人《INTER-WORLD/SPHERE: Over The Cube》
OKUNAKA Akihito《INTER-WORLD/SPHERE: Over The Cube》

I　florian gadenne + miki okubo《アンブレラ種》
フロリアン・ガデン＋ミキ・オオクボ《Umbrella species》

J　大西康明《石と柵 岐阜》
ONISHI Yasuaki《Stone and Fence Gifu》

K　身体企画ユニット ヨハク
《スクランブル交差空間 ―不干渉の調和―》
YOHAKU《Scramble Crossing Space -Harmony of Non-Interference-》

L　北川純《ネットショッピング》
KITAGAWA Jun《Online shopping》

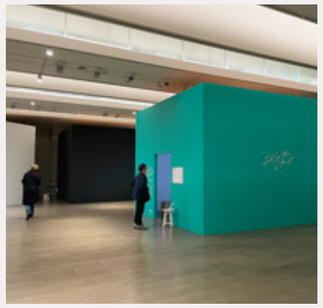
M　古屋崇久《橋の形》
FURUYA Takahisa《Shapes of bridges》

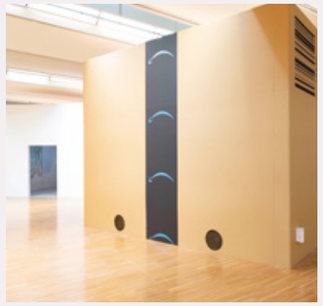
N　小孫哲太郎《NAGAMERU》
KOMAGO Tetsutaro《NAGAMERU》

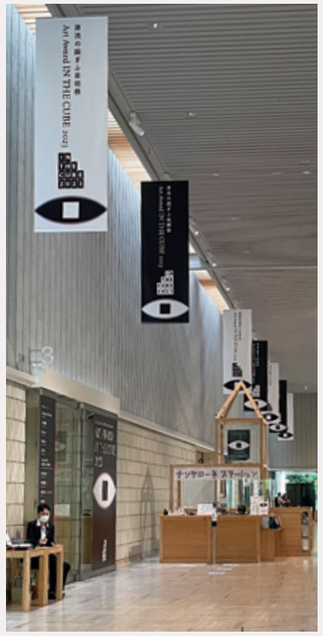
表彰式／開場式（テープカット）

日　時：2023年4月22日（土）13:30～14:30
会　場：岐阜県美術館 多目的ホール・展示室3入口（特設会場）

会期の初日には、審査員7名のご紹介に続き大賞及び審査員賞の表彰を、その後、展示室3入口前でテープカットを行い、華々しくAAIC2023の開幕を迎えた。

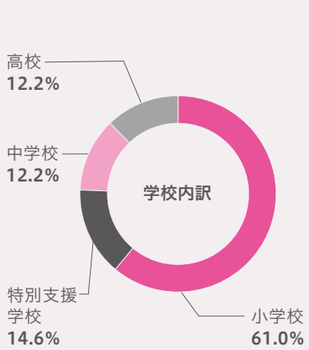


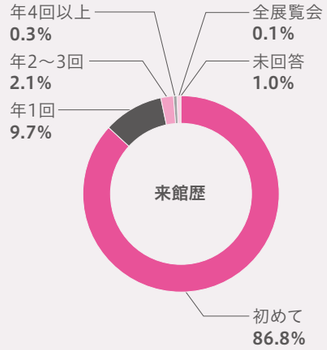


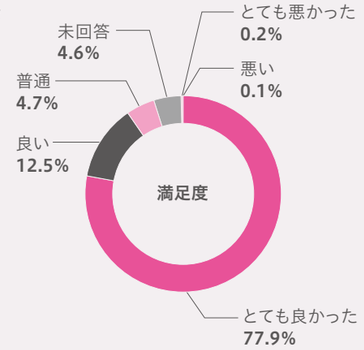


学校団体鑑賞

「新たな形のアートの鑑賞機会の提供」の一環として、県内小・中・高・特別支援学校（計41校）の児童・生徒（計1,676名）が観覧する「学校団体鑑賞」を実施。美術館での鑑賞マナーを学ぶとともに、表現力や創造力を高めることを目的とした対話型鑑賞に重点をおいた。







自由記述欄抜粋

「美術館には初めて来たが、家族にも見てもらいたいと思った。」
「どの作品にも僕にはとてもアイデアが思いつかなかったし、個性的なものも多かったので、鑑賞がこんなにも楽しいものなんだと思った。」
「いろいろな芸術先品を見られて楽しかったし不思議だった。また、作品を作った方は、どんな気持ちで作られたかなと考えることは、とても楽しいことだと気づき、芸術に興味がわいてきた。」

関連プログラム［会期中イベント］

4月22日（土）から6月18日（日）の会期中には多彩なイベントを開催し、展覧会をPR。

01

AAIC2023入選作家が各キューブに“在廊”して作品の見どころを紹介。

Artist IN THE CUBE

日　時：2023年4月22日（土）15:30〜17:30
会　場：岐阜県美術館 AAIC2023展示スペース
参加者：約50名（事前申込制）

表彰式・開場式後に各作家がキューブに在廊し、鑑賞者へ自身の作品の見どころ等々を紹介。事前申込みの方だけにとどまらず、多くの来場者の方々も一緒に作品を楽しんでいただいた。

02

それぞれの世界観で見る“「リアル」のゆくえ”。

AAIC2023審査員によるクロストーク “「リアル」のゆくえ”

日　時：2023年4月30日（日）14:00〜15:30
会　場：岐阜県美術館 講堂
参加者：121名（事前申込制）

AAIC2023審査員の岩崎秀雄さん・北村明子さん・森村泰昌さんの3名が、「AAICの印象（審査員の依頼を受けたときの印象）」「審査の所感」「印象深かった作品（どこを評価したか・しなかったか）」「テーマとキューブに対する審査員としての捉え方」「AAICに期待すること」等々を、中日新聞文化芸能部デスクの中村陽子さんを聞き手に、多彩な視点でお話しいただいた。

参加者コメント

「審査員の方々の話を聞く貴重な機会でした」
「様々なバックボーンを持つ審査員がいることで、話がおもしろかった」
「AAICの審査方法、賞を選ぶ方法など、ここに至った経緯を聞くことができた」
「ARTに関するリアルの意味について考えさせられた」
「全然タイプの違う視点からの御三方で、本当に面白かったです」

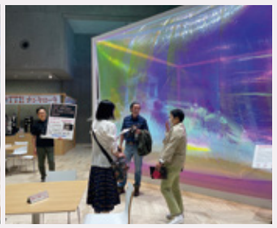
03

AAIC企画委員が14のキューブを巡りながら、AAIC2023の見どころや楽しみ方をご案内。

AAIC企画委員によるキューブツアー

日　時：2023年5月19日（金）・6月16日（金）
各日18:00〜19:00
会　場：岐阜県美術館 AAIC2023展示スペース
参加者：各日約20名（事前申込制／当日参加有）

会期中の夜間開館日において、AAIC企画委員でもありAAIC2023制作アドバイザーでもある衣笠文彦さんが、AAIC立ち上げの想いやAAIC2023の作品制作支援での話を交えながらAAIC2023の見どころや楽しみ方を案内した。



関連プログラム［会期中ワークショップ］

01

AAIC2023入選作家によるワークショップ
目隠し食育陶芸体験
小孫哲太郎

日　時：2023年4月23日（日）13:00〜16:00
会　場：岐阜県美術館 アトリエ
参加者：24名（事前申込制）

目隠しをして、普段とは違う感覚で土をさわって自分のオリジナル器を制作。食べることや器をつかうことに新しい発見を感じていただいた。後日、焼き上げた陶磁器をお渡しした。

参加者コメント

「目隠しをして作ってみました。
不思議体験！」
「作家さんの人柄が伝わって、一緒に時間を過ごせてとても楽しかったです。」

02

AAIC2023入選作家によるワークショップ
超巨大！透明な風船にお絵描き！
奥中章人

日　時：2023年5月5日（金・祝）13:30〜15:30
会　場：岐阜県美術館 アトリエ
参加者：29名（事前申込制）

幼児絵具を使って空気に絵を描いてみる。巨大な透明風船の中に入って、参加者の思いつきや発想を全員と共有しながら、様々な世界観を描いた。参加者の多くは親子で楽しんでいただいた。持ち帰りたい部分をキャンバスパネルに貼ってお渡しした。

参加者コメント

「何でも自由にぷかぷか浮いている空間の中でやるのはおもしろかった。」
「大人も子どももとても楽しく夢中になれる活動でした。」

03

AAIC2023入選作家によるワークショップ
ダンボール箱を作ってみる。
北川純

日　時：2023年5月14日（日）13:30〜15:30
会　場：岐阜県美術館 アトリエ
参加者：9名（事前申込制）

大きなダンボール板からオリジナルダンボール箱を作る。大きさは自由。基本的な構造を知ってもらい、各々がいろんなサイズのダンボールを制作。出来上がったダンボールには、各々が自由に絵や文字を描いて自分だけのダンボールを制作した。

参加者コメント

「材料など充分に整えてもらったし
スタッフの方も親切に教えていただきました。」
「いろんな絵が描けたり、たくさんの人に助けてもらえるのがいいなと思いました。」

04

AAIC2023入選作家によるワークショップ
大きな／小さな生き物?!
視点を変えればおもしろい
florian gadenne＋miki okubo

日　時：2023年5月20日（土）13:00〜16:00
会　場：岐阜県美術館 アトリエ
参加者：11名（事前申込制）

岐阜県内の自然や都市の風景の中に、尺度を変えて大きく／小さくなった動植物を描いてみる。動植物は、各々が好きな動植物。普通ではありえない世界観を自由に描いた後は、各々の世界観を参加者みんなで話し合った。

参加者コメント

「難しかったですが、新鮮な感覚で描くことができて楽しかったです。」
「色のぬり方を丁寧に教えていただいたので分かりやすかった。」

05

AAIC2023入選作家によるワークショップ
橋を渡ろう！
古屋崇久

日　時：2023年5月28日（日）13:30〜15:30
会　場：岐阜県美術館 庭園
参加者：16名（事前申込制）

岐阜県の美しい川の如く岐阜県美術館の庭園に流れる小川。岐阜の木材を麻紐で組み合わせて皆で橋を作り、出来上がった橋を順番に渡ってみる。水に濡れながらの作業を気にすることなく、保護者も含めた参加者全員の笑顔があふれた。

参加者コメント

「協力して作品を作ることが楽しかった。」
「本当に橋をつくり、わたれるのが良かった。」

06

AAIC2023入選作家によるワークショップ
太陽がなくなったら
千葉麻十佳

日　時：2023年6月18日（日）13:30〜15:30
会　場：岐阜県美術館 ACルーム
参加者：9名（事前申込制）

もし太陽が今この瞬間になくなったら、最後の光が届くまでの“8分19秒”のまだ明るい間に何をするか？実際に“8分19秒”を各自で何度も体感してみて、自分なら何をするかを語り合う。最後は自身への手紙を書き上げた。

参加者コメント

「短い時間でしたが楽しい時間が過ごせました。」
「普段は考えてみない事を、皆で考える事ができて楽しかった。」

Chapter

3

Data

第3章
資 料

スケジュール

2021

11月9日(火)	AAIC2023 開催概要決定／公式サイト開設
12月10日(金)	公募要項発表
12月24日(金) ～2022年5月16日(月)	作品応募受付

2022

1月22日(土)	AAIC2023 トークイベント・公募説明会in名古屋／港まちポットラックビル
1月30日(日)	AAIC2023 トークイベント・公募説明会in東京／3331 Arts Chiyoda
2月12日(土)	AAIC2023 トークイベント・公募説明会in福岡／福岡アジア美術館
2月20日(日)	AAIC2023 トークイベント・公募説明会in京都／FabCafe Kyoto ※以上4回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、各会場の実施を中止し、オンラインで開催。後日、公式サイトで公開。
3月12日(土)	AAIC2023 トークイベント・公募説明会in金沢／金沢アートグミ
3月19日(土)	AAIC2023 トークイベント・公募説明会in岐阜／岐阜県美術館
9月1日(木) ～2023年1月13日(金)	AAICサポーターズ(ボランティア)募集
9月25日(日)	一次審査会／JRゲートタワー カンファレンス
11月9日(水)	一次審査結果発表
11月27日(日)	AAIC2020大賞作家によるワークショップ「石から見いだす自分だけのカタチ」 講師：山本麻璃絵＋姫野亜也／飛騨高山まちの博物館(高山市)

2023

1月15日(日)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「空気と光で体感！『巨大気球を浮かせてみよう。』」 講師：奥中章人／セラミックパークMINO(多治見市)
2月5日(日)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「おもしろいうごきと景色を組み合わせ、ショートムービーをつくろう『カメラでうごき採集！』」 講師：身体企画ユニット ヨハク／大垣市スイトピアセンター(大垣市)
3月5日(日)	AAIC2023審査員によるトークイベント 山極壽一 講演会「アートは人類に何をもたらしたか」／岐阜県美術館(岐阜市)
3月20日(月)～3月23日(木)	ベースキューブ設置
3月24日(金)～4月6日(木)	作家作品制作
4月9日(日)	二次審査会／岐阜県美術館
4月18日(火)	二次審査結果発表
4月22日(土)	表彰式・開場式／AAIC2023 開幕 「Artist IN THE CUBE」(各作家)
4月23日(日)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「目隠し食育陶芸体験」講師：小孫哲太郎
4月30日(日)	AAIC2023審査員によるクロストーク“「リアル」のゆくえ” 登壇者：岩崎秀雄・北村明子・森村泰昌、聞き手：中村陽子
5月5日(金・祝)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「超巨大！透明な風船にお絵描き！」講師：奥中章人
5月14日(日)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「段ボール箱を作ってみる。」講師：北川純
5月19日(金)	AAIC企画委員によるキューブツアー
5月20日(土)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「大きな／小さな生き物?!視点を変えればおもしろい」 講師：florian gadenne+miki okubo
5月28日(日)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「橋を渡ろう！」講師：古屋崇久
6月16日(金)	AAIC企画委員によるキューブツアー
6月18日(日)	AAIC2023入選作家によるワークショップ「太陽がなくなったら」講師：千葉麻十佳 AAIC2023 閉幕
6月19日(月)～6月25日(日)	作品・キューブ撤去

広報

華やかな会場装飾とともに、ポスター・チラシ・雑誌広告・新聞広告・交通広告・web広告等々で広く告知。
AAIC2023では、岐阜駅前を飾る「シティドレッシング」と、公式サイトから鑑賞できる「バーチャル鑑賞」を実施した。

会場装飾

美術館正門

会場エントランス

展示室3入口

展示室4入口

審査員講評パネル

コンセプトパネル

スケジュールパネル

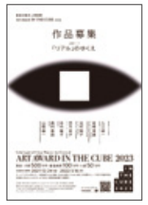
ホールタペストリー

ポスター／チラシ／広告／グッズ

公募期：2021年12月24日－2022年5月16日

公募ポスター

公募チラシ



雑誌広告
2022年1月7日 美術手帖
2022年1月25日 芸術新潮

web広告
2022年1月4日～31日
2022年4月1日～28日
登竜門・公募ガイド

2022年1月4日～2月3日
2022年4月1日～30日
SHIFT・ART iT・Facebook

PRイベントポスター

PRイベントチラシ

エコバッグ

ポロシャツ

クリアファイル

のぼり

会期前

入選発表チラシ

ボランティア募集チラシ

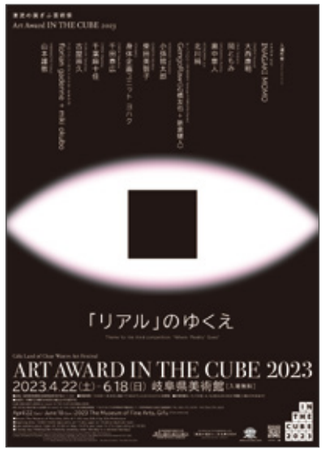
プレイベントチラシ

プレイベントチラシ

トークイベントチラシ

雑誌広告
2023年3月7日 美術手帖
2023年3月25日 芸術新潮

会期前～会期中



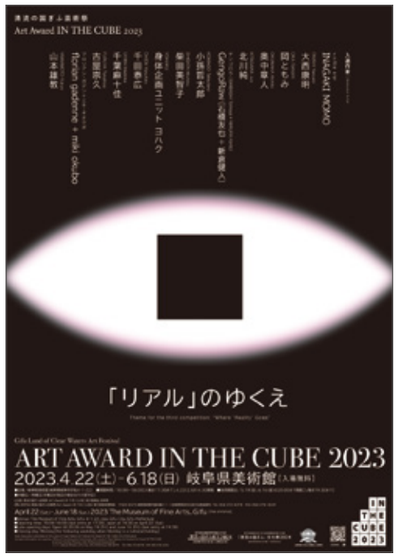
開催周知ポスター

開催周知チラシ

会期中イベントチラシ

ガイドブック

web広告
2023年4月1日～28日 JDN
2023年4月1日～30日 Tokyo Art Beat・SHIFT



交通広告　JR駅貼り2023年4月24日～30日・JR中吊り2023年4月27日～5月3日

県内フリーペーパー
2023年4月20日・25日・28日

新聞広告
2023年4月22日 中日新聞岐阜版・岐阜新聞 全5段

シティドレッシング

2023年4月21日－6月18日

JR岐阜駅前デッキ 横断幕

JR岐阜駅前デッキ のぼり

JR岐阜駅前バスターミナル のぼり

名鉄岐阜駅前アーケード 天吊りバナー

動画

作品募集

広くAAIC2023への応募を募るために、AAICの魅力・AAIC2017と2020の実績・AAIC2023の公募要項を動画にまとめた。

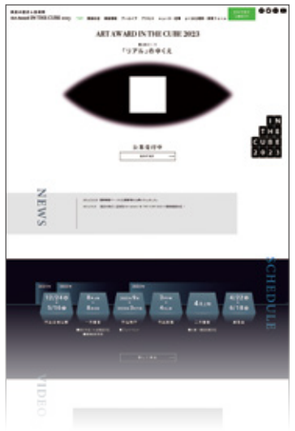
作家紹介

展覧会に興味を持っていただき、来場を促進するために、制作途中の作家へ取材して、完成に向けた想いや意気込みを動画にした。

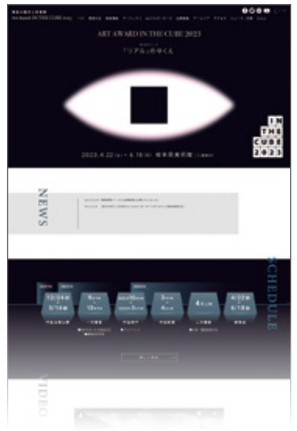
二次審査講評

入賞作品を決定する二次審査を終えた審査員にインタビューし、講評を一つの動画としてまとめた。

公式サイト



公募期



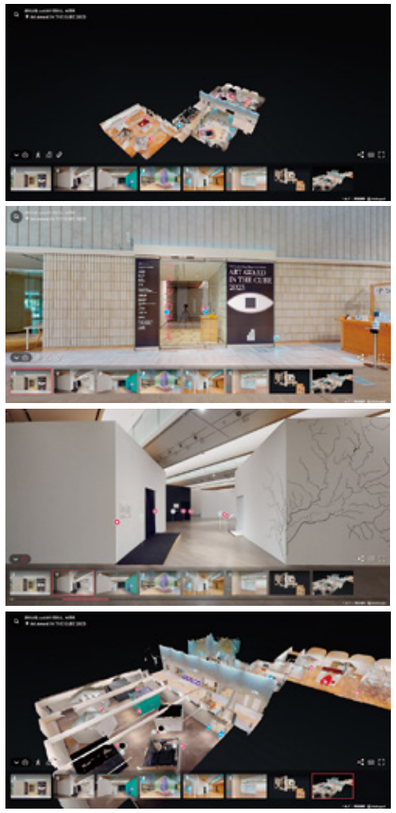
入選発表

開幕後

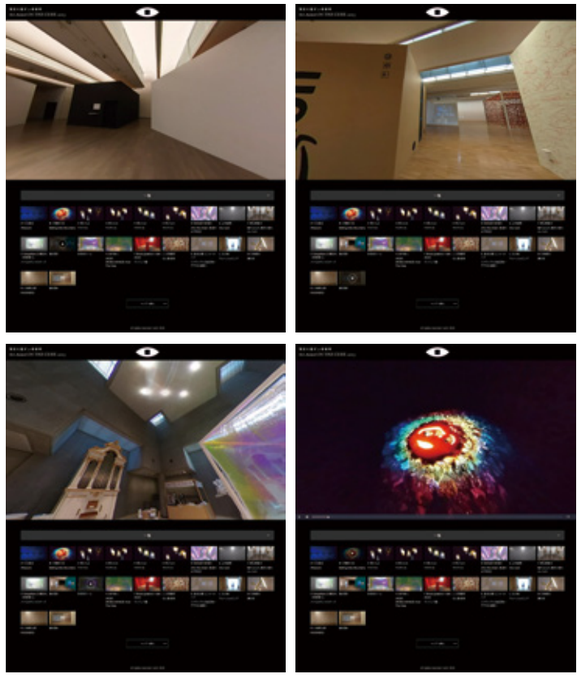
バーチャル鑑賞

多くの皆様に鑑賞いただけるよう、パソコンやスマートフォンなどから時間・場所にとらわれず展示会場を歩いて移動しているような目線で鑑賞できる「3Dビュー映像」と「360°動画」を展覧会の開幕にあわせて公式サイト上に公開。「来場前に事前確認」「会場で見た後に、もう一度鑑賞」「行きたくても行けないのでリモートで鑑賞」等々、多くの方々にご利用いただいた。

3Dビュー映像



360°動画

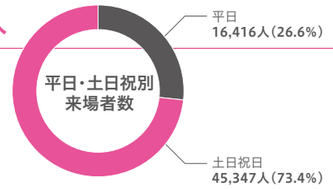


バーチャル鑑賞はこちらから

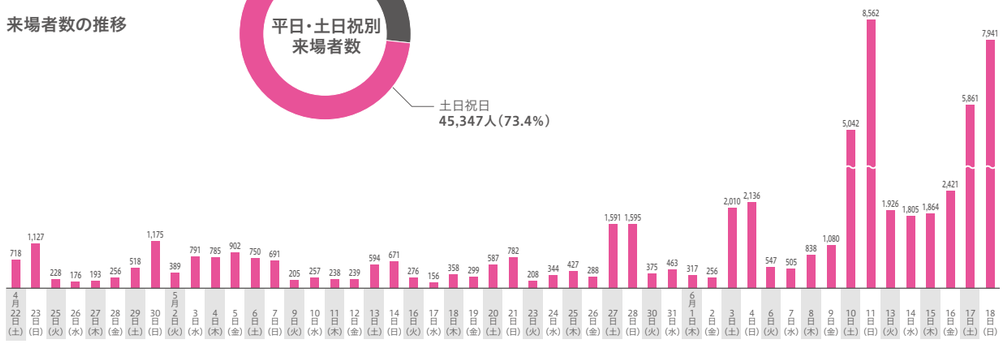
来場者アンケート

ご来場いただいた方による会期中のSNS投稿をきっかけに、来場者数が増加。会期中の来場者数の推移と来場者アンケート（アンケート項目からの抜粋）をまとめた。

来場者数：61,763人

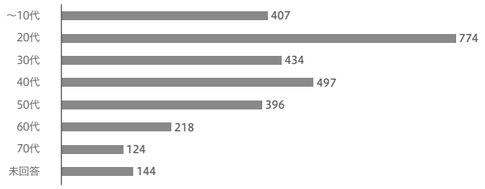


来場者数の推移

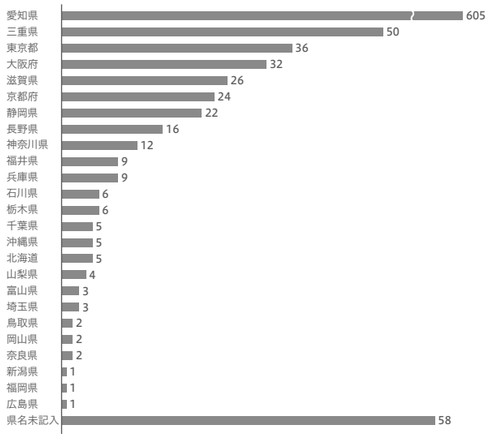


来場者アンケート：回答数2,994件

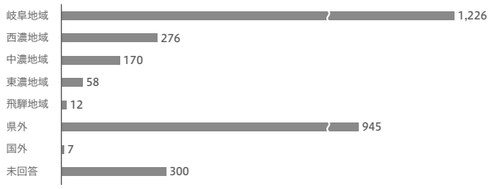
年齢



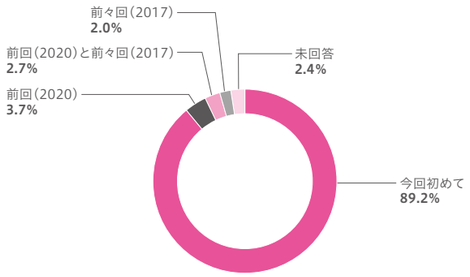
県外内訳



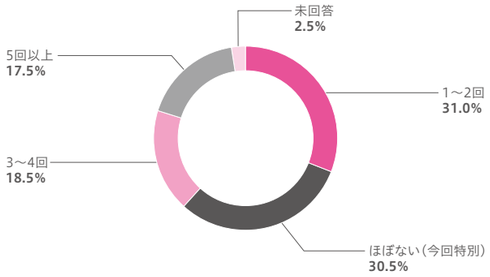
お住まいの地域



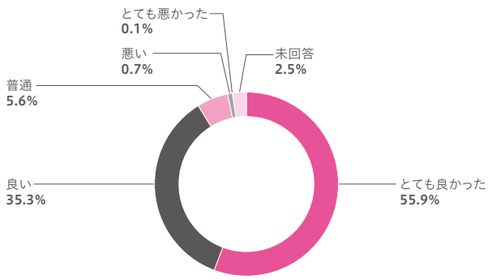
前回·前々回のAAICを鑑賞したことがありますか



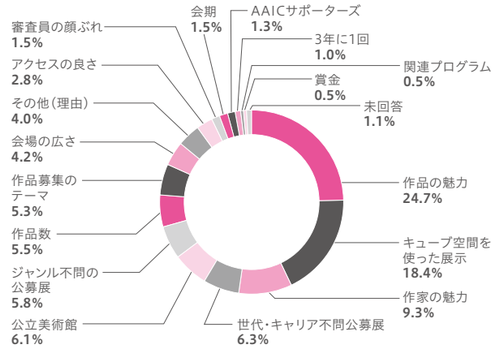
他の美術展への年間訪問回数を教えてください



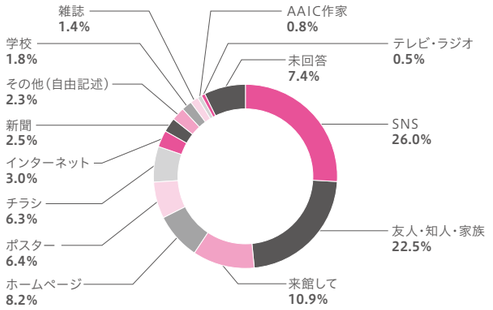
AAIC2023をご覧になっていかがでしたか



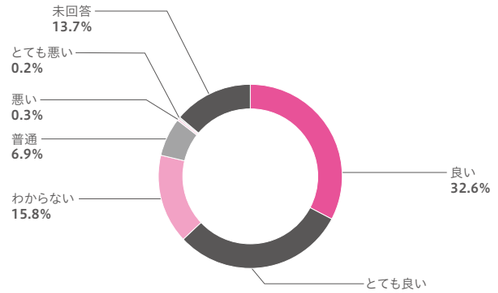
「とても良かった」「良い」と思った理由



AAIC2023をどちらで知りましたか（複数回答可）



「バーチャル鑑賞」の取り組みについて感想をお聞かせください



その他、ご感想やお気づきの点等（自由記述／いただいたご意見·感想から一部抜粋）

展覧会全般について

- とても見応えがあった。美術館に入った途端、日常から離れた場所に飛び込んだ感覚がした。
- 作品それぞれがいろいろな視点でとらえ、考えを形にしているところがすごい。アートってすばらしい！！！
- 毎年開催してほしい。
- 20年生きてきて初めて岐阜県美術館に来たが、とても感動した。鳥肌がたった。
- 静かに観たかったので2回来館しました。アーティストの方に感想を伝えたいくらい良かった。
- 今まで見た公募展で一番見応えがあったし、夢中で見てしまった。次回があれば、必ず見たい。
- 次回公募でやるときは応募してみたいなと思った。いろんな価値観、視点に触れられて、良い刺激になった。
- 他の現代アート展に比べて規模は大きくないが、クオリティーが高く、心に残る作品が多かった。
- 美術館に普段来ないような層（10代、子ども連れ）が来ていることは大変素晴らしいが、作品を鑑賞する上でのマナーや暗黙の了解が薄れ、ややストレスを感じた。
- 駐車場の整理がよくできていなかったので、混雑時の交通整理をもう少ししっかり行っていただけるとよい。
- テーマを先に理解したうえで鑑賞することをもっと告知するべき。そうでなければ作品の魅力が半減する。

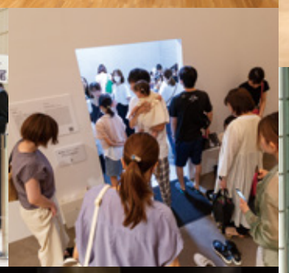
キューブ·テーマについて

- 全員が同じサイズのキューブという制約の中での作品づくりなので、比較がしやすいし、力量の差が出て面白い。
- キューブ空間の中に様々な表現が詰め込まれていて大変面白かった。
- 箱の中で展示することで、人目や人の流れを気にせず作品に没入することができた。普段の美術鑑賞より、長い時間、濃い密度で作品を観ることができた。
- それぞれの作家の「リアル」を考えさせられて良かった。コロナ、デジタル…今を感じさせられるテーマだと思う。

最後尾

AWARD
THE CUBE

ZON



IN THE
2023

IN THE CUBE
2023

最後尾

ART AWARD
IN THE CUBE
2023

運営体制

実行委員会

役割：事業計画、予算、その他運営上の重要事項の決定

名誉会長　古田 肇（岐阜県知事）
顧問　2名
会長　土屋 明之（岐阜県芸術文化会議 会長）
副会長　岐阜県環境生活部県民文化局長
委員　17名
監事　2名

※事務局：岐阜県県民文化局文化創造課

運営委員会

役割：企画・運営の検討

委員長　神戸 峰男
（日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授）
委員　8名

企画委員会

役割：企画・運営の詳細について検討

委員長　桑原 鑛司（洋画家）
委員　8名

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会　委員名簿

Art Award IN THE CUBE を 円滑に開催するため、関係機関及び団体との連絡調整など必要な事業を行っています。

役職	氏名	所属機関・団体役職
名誉会長	古田　肇	岐阜県知事
顧問	野島　征夫	岐阜県議会 議長
	杉山　幹夫	株式会社岐阜新聞社 最高顧問
会長	土屋　明之	岐阜県芸術文化会議 会長
副会長	篭橋　智基	岐阜県環境生活部県民文化局長
委員（五十音順）	有賀　信彦	株式会社中日新聞社 岐阜支社長
	石﨑　泰之	岐阜県現代陶芸美術館 館長
	今西　良共	岐阜県立国際園芸アカデミー 学長
	小野寺　茂樹	日本放送協会岐阜放送局 局長
	金子　政則	岐阜県町村会 会長
	桑原　鑛司	Art Award IN THE CUBE企画委員会 委員長
	境　敏幸	株式会社大垣共立銀行 取締役頭取
	柴橋　正直	岐阜県市長会 会長
	髙木　敏彦	公益財団法人岐阜県教育文化財団 理事長
	竹本　義明	名古屋芸術大学 学長
	田島　一男	岐阜県美術館後援会 会長
	日比野　克彦	岐阜県美術館 館長、東京藝術大学 学長
	堀　貴雄	岐阜県教育委員会 教育長
	村瀬　幸雄	株式会社十六銀行 取締役会長
	森　保	岐阜県立国際たくみアカデミー 校長
	矢島　薫	株式会社岐阜新聞社 代表取締役社長
	若井　敦子	岐阜県議会厚生環境委員会 委員長
監事	高野　朋治	岐阜県出納管理課長
	柳　友仁	公益財団法人岐阜県教育文化財団 経営管理課長

清流の国ぎふ芸術祭運営委員会　委員名簿

全国規模の公募展（AAIC）、県民参加型の公募展（ぎふ美術展等）の企画運営に関する専門的な事項を検討していただいています。

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	神戸　峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学 名誉教授
委員（五十音順）	臼井　千里	書家、岐阜県世界青年友の会 常務理事
	角田　茉瑳子	児童文学作家
	加藤　幸兵衛	陶芸家
	桑原　鑛司	洋画家
	土屋　明之	岐阜県芸術文化会議 会長
	仲居　宏二	元聖心女子大学 教授
	日比野　克彦	岐阜県美術館 館長、東京藝術大学 学長
	廣瀬　輝	一般社団法人中部地域づくり協会 理事長

Art Award IN THE CUBE 企画委員会　委員名簿

全国規模の企画公募展「Art Award IN THE CUBE」の企画運営の詳細事項（展覧会のテーマ、企画公募展の実施計画、公募作品の規格、審査員及び審査方法、広報計画など）について、専門的な立場から検討していただいています。

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	桑原　鑛司	洋画家
委員（五十音順）	青木　正弘	美術評論家
	安藤　泰彦	美術作家、元情報科学芸術大学院大学（IAMAS） 教授
	河西　栄二	岐阜大学教育学部 教授
	衣笠　文彦	彫刻家、岐阜聖徳学園大学短期大学部 非常勤講師
	佐藤　昌宏	画家
	髙橋　綾子	美術評論家、名古屋造形大学 教授
	日比野　克彦	岐阜県美術館 館長、東京藝術大学 学長
	三輪　眞弘	情報科学芸術大学院大学（IAMAS） 教授

企画委員長 総評

Project supervisor's Comment

Art Award IN THE CUBE 2023 を終えて

桑原 鑛司（Art Award IN THE CUBE 企画委員会 委員長）

”現代アート”なる言葉が新聞、雑誌に頻繁に現れるようになったのは、20年ほど前であろうか。それまでポロックが絵画の限界を追求し、ヘンリー・ムーアが堂々たる人間の存在を示そうとしていた時代は、芸術の最先端は現代美術（モダンアート）と呼ばれていた。それが、医療においてIPS細胞が開発され、コロナが人類を恐怖に陥れ、AIが人々に不安と希望をもたらした頃から世の中は大きな変化を見せ始めた。隔世的と言って良いほどの変化であった。美術においてもそれは始まった。

2017年に第1回を開催したAAIC展は、自ら現代アートの展覧会と名乗ったことないけれど、作家たちも観客も「これは現代アートの展覧会だ」と捉えたようだった。現代アートという言葉は、重箱読みのようなおかしな日本語ではあるが、美術における大変化を象徴する言葉となった。第1回のAAIC展を観た私の友人は「あれが美術か?どうやって観ればいいんだ?」と言った。それまでの美術の常識では現代アートを受け止めることができなかったのだ。美術館へ展覧会を観に行けば、そこにあるのは絵画か彫刻だと思っている人が戸惑うのは当然であったろう。しかし、人間はどんなに大きな変化にも、良くも悪くも慣れる。明日に向かって希望が持てるならば、時間の経過とともに克服し、親しむようにさえなる。

第3回のAAIC展を終えた今、人々の変化には眼を見張るものがある。特に20～30代の若い人々の柔軟な感受性は素晴らしい。入場者数は飛躍的に増え、アンケートから読み取れる反応は極めて好意的である。作品に対する理解度がはるかに深まり「楽しかった」、「共感した」などの声が非常に多かった。「現代アートの展覧会の開催をもっと増やして欲しい」という要望には正直驚かされた。3回の開催を経て、人々が現代アートに馴染んできたことを実感することができる。こうなれば、作家たちに対する期待も膨らんでくる。私たちと同じ今という時代を生きる作家たちがどんな作品を生み出してくれるのか。どんな”今”を見せてくれるのか。

最後に、今回の展覧会開催の舞台裏について述べておきたい。まず一次審査においては依然として課題を残す。600点近い応募作品を十数点に絞り込む審査を、書類、マケット、スケッチ、DVDによって行わなければならないことから生ずる多くの問題にいかに対処するか、である。

一方で特筆すべきことは、制作アドバイザーというポジションの新設である。作家の制作支援に関しては、本展の特色として入選作家に50万円の制作支援金を提供すること、制作場面でのボランティアによる支援体制の構築、材料調達等に関わる企業・団体の紹介など、作家の制作活動の助けになると思われることはできる限りのことをしてきたが、これらに加えて今回は、制作アドバイザーとして、AAIC企画委員であり彫刻家でもある衣笠文彦氏を配したことを記しておかなくてはならない。作家とボランティア、展覧会事務局（県・文化創造課）との繋ぎ役である。制作現場で発生する様々な事態に対応しようとの思いから、衣笠氏が自ら買って出てくれた役割であったが、これが見事にハマった。あらゆる意味で現場の潤滑油となった。

企業・団体からの協賛を募ることも力を入れた。以前から公益財団法人 田口福寿会、十六フィナンシャルグループ、大垣共立銀行からのご協力は頂いていたが、一般県民も含めて広く企業、団体等に認知、応援していただけるようにしたいとの思いから、地道に働きかけを始めた。限られた時間だったため多くは期待できなかったが、それでも新たに13の企業・団体が快く応じてくださり、次回以降に一つの道筋を拓くことができた。

またボランティア、展覧会事務局スタッフの気持ちのこもった取り組みは、本当にありがたいものであった。特に事務局スタッフの、何としても展覧会を成功させようという熱い思いは、長い準備期間を通して、また展覧会場においても変わることなく感じることができた。例えば県内の小、中、高、特別支援学校、合わせて41校を、各校の都合に合わせて招待し、団体鑑賞の案内をするという取り組みにも見ることができた。これは、生徒たちはもとより親、家族にも大好評であった。熱意、情熱というものはどんな場合でも何事かをなす時の原動力であろう。

令和5年度
文化庁
文化芸術創造拠点
形成事業

AAIC2023の記録動画はこちらから

6万人を超える方々にご来場いただいた「AAIC2023」の入選作家、審査、作品制作、完成作品、表彰式・開場式、展覧会場のにぎわいの様子などを約15分の動画にまとめました。

発行年　2023年12月発行

編　集　清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会事務局

印　刷　サンメッセ株式会社

発　行　清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会

©清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
無断転載・複写を禁じます。

本書では敬称を省略しております。
また、本書掲載の肩書きは2023年8月1日現在のものです。

助　成　公益財団法人田口福寿会

協　賛　十六フィナンシャルグループ　OKB 大垣共立銀行
サンメッセ株式会社　CCi　一般社団法人 中部地域づくり協会　KAI
森ビル都市企画株式会社
昭和コンクリート工業株式会社
一般社団法人 岐阜ファッション産業連合会
中日本高速道路株式会社 名古屋支社
他5社